㈶広島市文化財団発掘調査報告書　第５集

長　尾　遺　跡

—広島市東区戸坂所在—

1999

財団法人広島市文化財団

a　ＳＨ３炭化材出土状況（上層・東から）

b　ＳＨ３生活面検出状況（東から）

はしがき

広島中心部の北東に隣接する東区戸坂地区（旧戸坂村）は，古くは古代山陽道の街道筋として栄えてきました。昭和30年の広島市との合併後は、その位置条件から急速な住宅地化が行われてきましたが，今回新たに計画された宅地造成地の予定区域内に位置する丘陵の尾根上で発見されたのが長尾遺跡です。

調査の結果，竪穴住居跡や掘立柱建物跡などからなる弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落跡や，古墳などを確認しました。特に，当該時期の集落遺跡の本格的な調査は，本地区では初めてのものであり，本地区の，また広島市域での当時の生活や社会を復元するうえで，非常に貴重な資料を得ることができました。

この報告書が少しでも多くの方々に活用され，市民の皆様が郷土の歴史や文化について理解を深められる一助となれば幸いに存じます。最後になりましたが，調査にあたりご指導・ご助言いただきました諸先生方，ならびに発掘調査にご協力いただきました関係機関・調査補助員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成11年12月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例　　言

1．本書は，広島市東区戸坂における戸坂住宅団地造成工事に伴い，平成10年度に実施した長尾遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は日本勤労者住宅協会から委託を受け，財団法人広島市文化財団が実施した。

3．本書は楮木敬太が執筆・編集した。

4．遺構及び遺物の実測・写真撮影は，高下洋一，荒川正己，山脇一幸，楮木敬太が行った。

5．長尾第4号古墳の試掘調査の図面は，広島市教育委員会生涯学習部文化財担当から提供を受けた。

6．第2図に掲載した土器は，学校法人広島城北学園所蔵である。

7．本書に掲載した航空写真撮影は，スタジオ・ユニに委託した。

8．ＳＨ３出土炭化材および板状土塊に関する分析調査は，パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

9．本書挿図に使用した方位は，第1図が真北，他が磁北である。

10．第1図は，建設省国土地理院発行の50，OOO分の1の地形図（広島・海田）を複製したものである。

11．本書に使用した遺構の略号は，次のとおりである。
ＳＨ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＸ：テラス状遺構　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット
ＭＴ：古墳　ＳＴ：埋葬施設

目　　次

Ⅰ　は　じ　め　に…… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境…… 4
Ⅲ　遺構と遺物
　弥生時代…… 13
　古墳時代…… 31
Ⅳ　ま　と　め…… 40

付　表　目　次

第１表　出土土器観察表（1）弥生土器…… 29
第２表　出土土器観察表（2）土師器・須恵器…… 37

挿　図　目　次

第１図　長尾遺跡周辺遺跡分布図…… 3
第２図　城北学園グラウンド遺跡出土遺物実…… 6
第３図　長尾遺跡周辺地形図…… 10
第４図　南側平坦面遺構配置図…… 11
第５図　北側平坦面遺構配置図…… 12
第６図　ＳＨ１実測図…… 15
第７図　ＳＨ２実測図…… 17
第８図　ＳＨ３実測図…… 19
第９図　ＳＨ３炭化材層別出土状況実測図…… 20
第10図　ＳＨ３炭化材樹種別出土状況実測図…… 20
第11図　ＳＨ・ＳＸ２実測図…… 22
第12図　ＳＢ１実測図…… 24
第13図　ＳＸ１実測…… 25
第14図　ＳＸ３実測…… 25
第15図　ＳＫ１実測…… 26
第16図　ＭＴ４実測図（調査前）…… 32
第17図　ＭＴ４実測図（調査後）…… 33
第18図　ＭＴ４土層断面…… 34
第19図　ＭＴ５実測…… 36
第20図　ＳＴ１実測…… 36
第21図　長尾遺跡出土遺物実測図(1)… 38
第22図　長尾遺跡出土遺物実測図(2)… 39

図　版　目　次

巻頭図版 a　ＳＨ３炭化材出土状況（上層）
　　b　ＳＨ３生活面検出状況
図版１　a　長尾遺跡遠景（航空写真）
　　b　長尾遺跡全景（航空写真）
図版２　a　南側平坦面近景（航空写真）
　　b　北側平坦面近景（航空写真）
図版３　a　ＳＨ１（完掘）
　　b　ＳＨ１ｂ床面検出状況
図版４　a　ＳＨ１ｂ炉跡土器出土状況
　　b　ＳＨ２（完掘）
図版５　a　ＳＨ３炭化材出土状況（下層）
　　b　ＳＨ３（完掘）
図版６　ＳＨ４・ＳＸ２
図版７　a　ＳＢ１
　　b　ＳＢ１・Ｐ１土器出土状況
図版８　a　ＳＸ１
　　b　ＳＸ３
図版９　a　ＳＫ１土器出土状況
　　b　ＳＫ１（完掘）
図版 10　a　ＭＴ４
　　b　ＭＴ５周溝
図版 11　a　ＳＴ１
　　b　ＳＴ１土器出土状況
図版 12　長尾遺跡出土遺物（1）
図版 13　長尾遺跡出土遺物（2）

Ⅰ　はじめに

広島市教育委員会は，平成元年７月に，日本勤労者住宅協会（以下勤住協とする）から，広島市東区戸坂出江地区の宅地造成計画事業地内の埋蔵文化財の有無並びにその取扱いについての照会を受けた。これを受けて，平成３年に試掘調査を行った結果，計画範囲の約半分を占める尾根筋のほぼ全域で遺跡の存在を確認した。遺跡の取扱いについて，勤住協と協議を重ねたところ，このうち前方後円墳１基・円墳２基の３基の古墳については，太田川水系の最下流で確認された前方後円墳を含み，非常に重要な遺跡と考えられることから，現状保存が行われることとなった。しかし。その他の部分については計画の変更は困難であるとの結論に達し，記録保存の措置を図ることとなった。

これを受けて勤住協は，財団法人広島市文化財団に発掘調査を委託して行うこととし，財団法人広島市文化財団では，平成10年４月27日から平成12年２月25日まで現地調査を実施した。

調査の関係者は下記のとおりである。

調査委託者　日本勤労者住宅協会
調査主体　　財団法人広島市文化財団
調査担当課　財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者　竹本　輝男　常務理事
　　堂官　正昭　文化科学部長
　　佐川　　清　文化科学部文化財課長
　　宮田　浩二　文化科学部文化財課主任（平成10年度）
　　今田日出登　文化科学部文化財課主任（平成11年度）
調　査　者　荒川　正己　文化科学部文化財課学芸員
　　山脇　一幸　文化科学部文化財課学芸員
　　椙木　敬太　文化科学部文化財課学芸員
調査補助員（50音順）
　乾操子　岩村京子　植木真澄　大塚勝広　柿田美也子　梶谷ミエ子　加藤恒子　川手京子
　川手ヨシエ　川手好春　久保田弘子　桑原晴美　酒本由里郁　佐久間寿美子　貞森真弓
　佐藤信子　菅原彰子　住川香代子　住川義治　高岡浩子　高木素子　高木すがこ　宅見陽子
　戸井逸子　殿岡鉄博　橋本礼子　浜田由倭子　平岡俊哉　森田美恵子 矢島とみ 横光美里

なお，日本勤労者住宅協会，広島県住宅生活協同組合，中電技術コンサルタント株式会社，広成建設株式会社，広島市教育委員会，戸坂小学校，戸坂城山小学校，東浄小学校，戸坂中学校，戸坂公民館の職員の方々，及び，戸坂連合社会福祉協議会をはじめ周辺住民の皆様ほか多くの方々には，調査を円滑に進めるにあたり，多大なご配慮とご協力をいただいた。また，現地発掘調査及び報告書作成にあたり，当財団埋蔵文化財発掘調査指導委員会の広島大

学名誉教授潮見浩氏，同文学部教授川越哲志氏，同教授河瀬正利氏，同助教授古瀬清秀氏から広範なご教示をいただいた。また，城北学園グラウンド遺跡の資料とその掲載については，同学園校長清水悦四郎氏のご協力をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

1. 長尾遺跡　2. 城北学園グラウンド遺跡　3. 長尾古墳群　4. 桜ヶ丘古墳　5. 宮の山古墳　6. 茶磨山南貝塚　7. 西山258m貝塚　8. 西山261m貝塚　9. 西山21Om貝塚　1O. 牛田早稲田遺跡　11. 牛田早稲田神社遺跡　12. 中山貝塚　13. 八幡山古墳　14. 龍泉寺古墳　15. 山根遺跡　16. 禅昌寺西遺跡　17. 惣田古墳　18. 中小田古墳群　19. 弘住遺跡群　20. 高陽台B地点遺跡　21. 金川遺跡　22. 城前遺跡　23. 高陽台A地点遺跡　24. 大久保遺跡　25. 大明地遺跡　26. 西願寺山墳墓群　27. 西願寺北遺跡　28. 梨ヶ谷遺跡　29. 末光E地点遺跡　30. 末光B地点遺跡　31. 末光D地点遺跡　32. 岩上山田遺跡　33. 末光A地点遺跡　34. 末光C地点遺跡　35. 山手遺跡群　36. 恵下山遺跡群　37. 寺迫遺跡　38. 西山・北山遺跡群　39. 狐ヶ城遺跡　40. 字那木山古墳群　41. 毘沙門台東遺跡　42. 毘沙門台遺跡　43. 神宮山古墳群　44. 大町七九谷遺跡群　45. 広島経済大学構内遺跡群　46. 寺山遺跡　47. 太田川放水路固定堰遺跡

第1図　長尾遺跡周辺遺跡分布図（S＝1：50，000）

Ⅱ　位置と歴史的環境

長尾遺跡は，広島市東区戸坂出江一丁目に所在する。

広島市は，広島県の南西部に位置する。その中心となる市街地は，県北西部の中国山地を源とする太田川が広島湾へ流れ込む際に形成した三角州上に発展してきた。この太田川は，市の北西部から東南方向に市内へ流れ込み，市北部の安佐北区可部町で東から流れ来る三篠川と合流する。その後，ニケ城山（標高483.2m）を主峰とするニケ城山山地列の西裾に沿って南へと流れを変え，幅約2㎞の河谷平野を形成しながら広島湾へと流れ込む。本遺跡の位置する戸坂地区は，ニケ城山山地列の南端部を形成する松笠山（標高334.5m）と茶臼城山（標高261m，太平山，西山，牛田山，茶磨山などとも言う1)）に北と南を挟まれた谷間の緩斜面と河谷平野からなる。本遺跡は，戸坂の谷間の南側緩斜面を形成する茶臼城山から北側に派生したナマコ形の緩やかな山脚の末端部尾根上に位置する。本遺跡からは戸坂一帯が，特に尾根先からは太田川下流域のほぼ全域が眺望できる。

戸坂地区は広島市の中心部の北東に隣接するという地理的条件から，1955年（昭和30年）の広島市との合併をきっかけに宅地化が始まり，とりわけ1965年以後，急激な宅地開発が行われてきた。しかし，開発は小規模な宅地造成に伴うものがほとんどであり，また，時代的な状況等から埋蔵文化財，特に集落跡などの確認・調査はほとんど実施されておらず，このため弥生時代の遺跡はわずかしか確認されていない。一方，戸坂地区を除く太田川下流域では弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が多数発見・調査されている。

これらの遺跡のうち弥生時代のものは，前期の遺跡としては中山貝塚2)及び山根遺跡3)が挙げられる。中山貝塚は，標高約10mの丘陵先端部に形成された弥生時代前期を中心とする遺跡であり，縄文晩期から弥生中期後半までの土器が出土している。しかしながら，建物跡などの遺構については確認がされていないため，集落の実態については明らかではない。山根遺跡については，前期の特徴をもつ鉢が出土しているが，工事中の単独出土のためその概要については明らかではない。

弥生時代中期になると，太田川東岸には弘住遺跡4)，大明地遺跡5)，狐ヶ城遺跡石6)，牛田早稲田神社遺跡7)，牛田早稲田遺跡8)が，太田川西岸には太田川放水路固定堰遺跡9)が確認されている。しかしながら集落に関する遺構としては，大明地遺跡で住居跡が一軒確認されているのみである。

弥生時代後期に入ると，遺跡数は急激に増加し，その殆とが丘陵上に営まれている。これは，度々洪水に襲われる太田川の氾濫原が農業用地には適していないため，太田川の支流が形成する小扇状地の末端や谷間の狭い平地を農業用地とし，集落などは丘陵尾根上に営まれた為と考えられている10)。以下，広島市域の弥生時代後期の指標である上深川式土器の編年（Ⅰ式＝後期前葉，Ⅱ式＝後期中葉～後葉，Ⅲ式＝弥生時代終末～古墳時代初頭と想定）11)をもとに後期集落遺跡の概観を行う。

集落跡は存続期間と遺構数から，①十数軒以上の住居跡を持ち，弥生時代中期後葉もしくは上深川Ⅰ式から上深川Ⅲ式までの2期以上に跨って存続する大規模なもの，②1～数軒の住居が一時期にのみ営まれた小規模なものに大別できる。前者には，太田川東岸に位置するものに，竪穴住居跡13軒が確認された恵下山遺跡群12)，竪穴住居跡16軒・掘立柱建物跡25

棟が確認された大明地遺跡，竪穴住居跡14軒・掘立柱建物跡１棟が確認された梨ケ谷遺跡13)が，太田川西岸に位置するものに，竪穴住居跡約70軒が確認された毘沙門台遺跡14)，竪穴住居跡49軒が確認された毘沙門台東遺跡15)，竪穴住居跡約19軒が確認された大町七九谷遺跡群16)等が属すると考えられる。一方後者には，上深川Ⅰ式の時期に末光遺跡群17)のＡ地点・Ｂ地点・Ｅ地点遺跡，牛田早稲田遺跡が，上深川Ⅱ式の時期には広島経済大学構内遺跡群の長う子遺跡・芳カ谷遺跡・大谷遺跡18)，末光Ａ地点・Ｂ地点・Ｄ地点遺跡，寺山遺跡19)，寺迫遺跡20)が，上深川Ⅲ式の時期には末光遺跡群Ｅ地点，山手遺跡21)，寺迫遺跡，西山・北山遺跡田22)，岩上山田遺跡23)，大井遺跡24)，金川遺跡25)，大久保遺跡26)，牛田早稲田遺跡がそれぞれ属すると考えられている。その後，古墳時代前期以降になると丘陵上から集落は確認されなくなる。

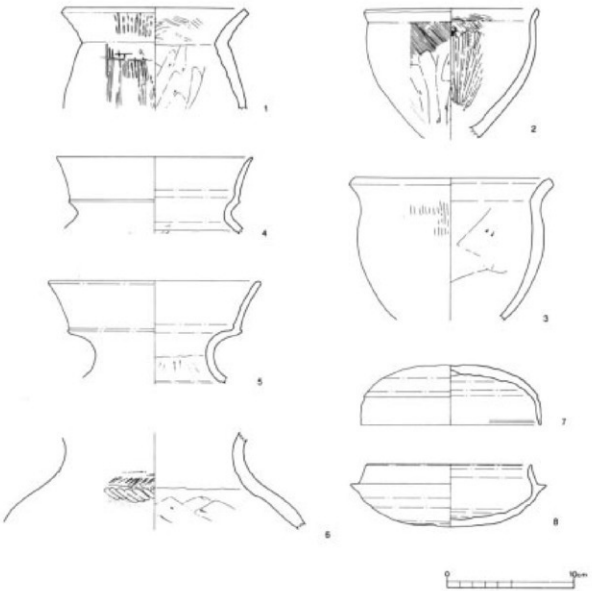
このように，他の地区では弥生時代後期の集落遺跡が多数確認されているが，戸坂地区では前述のとおり集落遺跡の調査は行われていない。遺物散布地として城北学園グラウンド遺跡27)が確認されたのみである。城北学園グラウンド遺跡は，長尾遺跡の尾根から東に１つ谷を挟んだ尾根上に位置していた。工事中の発見のため，遺構の存在は不明であるが，弥生土器等が出土している（第2図）。弥生土器は上深川Ⅱ式を中心に若干の上深川Ⅰ式土器と，上深川Ⅲ式並行の「山陰系土器」が出土している。

なお，戸坂地区の南側に位置する茶臼城山の山頂付近では西山261m貝塚28)，西山258m貝塚29)西山210m貝塚30)，茶磨山南貝塚31)などの貝塚群が存在し，いずれも上深川Ⅱ式の時期のものを主体としている。特に西山258m貝塚からは，巴形銅器，銅鏃，鉄鏃，骨鏃，鉋，鉄斧、石斧等が出土している。これらの遺跡は，軍事的様相の濃い遺物が多数出二上二していること，周辺の水田旭ゴとの比高が200m以上あり，市域の他の遺跡と比べて突出した高地に位罹していることから，典型的な「高地性集落」として注目されている。

次に墳墓を見ると，弥生時代後期は，土壙墓・土器棺墓や箱式石棺墓をもつ集団墓が一般集団の墓として捉えられている32)。しかし，弥生時代後期後半になると，太田川東岸に，円形や長方形の墳丘をもち，竪穴式石室などの埋葬主体をもつ墳墓が現れる。安佐北区旧高陽町域の梨ケ谷遺跡Ｂ地点，西願寺北遺跡33)，西願寺山墳墓群Ｃ地点・Ｄ地点・Ｅ地点34)である。これらの墳墓の出現は，
特定の墓域に社会的階層の高い人物が埋葬されるようになったことを示しており，後の古墳へとつながっていくと推定されている35)。

戸坂地区周辺では，上深川Ⅲ式の時期に相当する土器棺墓が出土した禅昌寺西遺跡36)が確認されているのみで，前述のような特定個人の墓は確認されていない。

古墳時代になると，太田川東西両岸で，埋葬主体に竪穴式石室を用い，中国製銅鏡や鉄器・玉類を副葬品とした前方後円墳や前方後方墳が現れる。東岸では吾作銘三角縁四神四獣鏡・上方作銘獣帯鏡・車輪石・玉類などが出土した中小田第１号古墳37)，西岸では内行花文鏡片・玉類などが出土した神宮山第１号古墳38)，環状乳画文帯神獣鏡が出土した宇那木山第２古墳39)などが，墳形や副葬品の種類などからいずれも首長墓と考えられている。５世紀代になると，古墳の数は増加する傾向を見せ，小河川を望む丘陵上に鉄製武器類や農具・工具類を副葬品にもつ古墳が築造されるようになる。しかし，こうした増加傾向も，６世紀



第２図　城北学園グラウンド遺跡出土遺物実測図（S＝１：３）

以降になると太田川下流域の古墳は点在する程度に減少し，逆に太田川を若干北上した旧可部町域に横穴式石室を埋葬施設とする古墳が急激に増加する。

戸坂地区周辺においては長尾遺跡の位置する屋根の先端部に長尾古墳群がある。なかでも第１号古墳は全長約43 mの前方後円墳である40)。現在のところ，太田川最下流域で確認された最大級の前方後円墳であり，規模・墳形ともに首長墓に相応しい。また，本古墳に隣接して円墳の第２・３号古墳が存在する。本古墳群は，墳丘の周囲に石棺や土壙墓などの埋葬施設が多数存在する特徴をもっている。５世紀紀代の古墳としては，松笠山山麓に位置する禅昌寺西古墳Ａ主体・八幡山古墳41)が，茶臼城山山麓に位置する宮の山古墳42)，桜ヶ丘古墳43)が挙げられる。禅昌寺西古墳Ａ主体では，５世紀前半～後半のものとされる箱式石棺５基・木棺直葬の主体部１基が確認されている。桜ヶ丘古墳は，旧地形図を見ると長尾古墳

群と同じ尾根の先端部に位置していたことが確認できる。また，城北学園グラウンド遺跡の位置する尾根先付近から須恵器（第２図７，８）が出土したと伝えられている44)。地理条件が長尾古墳群と似ていることから，城北学園グラウンド遺跡の位置する尾根先にも古墳が存在していた可能性がある。６世紀代の古墳としては龍泉寺古墳45)，惣田古墳46)があげられる。龍泉寺古墳は箱式石棺の中から鉄刀や提瓶が出土し，惣田古墳は横穴式石室を内部主体とし，皮袋形提瓶など市域では他に類例のない遺物が出土している。このように，戸坂地区は前方後円墳の存在や，６世紀代まで古墳が存在し続けるなど，太田川下流域のなかでも特殊な様相を示している。

ところで，古代から中世にかけての山陽道は，当時の国府があったとされる安芸郡府中町から中山峠を越え，戸坂の谷間を抜ける道筋を通り，現在よりも西を流れていたと考えられている太田川を，安佐南区中筋近辺で渡河したと推定されている47)。山陽道は古代における七官道の筆頭であり，この道が通過する戸坂の谷間は当時の交通の要衝であったといえよう。また，戸坂地区は．太田川を挟んだ対岸の安佐南区東原・西原地区とあわせて『倭名類聚抄』にみえる「安芸郡幡良郷」にも比定されている48)。これを裏付けるように，戸坂地区と東原・西原地区には，近年まで条里地割と考えられる，規格を一にする連続した方格状土地区画が残っていた。このことから，本地区は古くから農産物の生産地としても栄えていた可能性が考えられる。

以上は，古代における戸坂地区の状況のため，これらを単純に時代が遡る古墳時代に当てはめることはできない。しかしながら，古墳時代における戸坂地区の，広島市域における特殊な状況を考えれば，この時期から既に本地区が地理的・経済的に重要な地域であった可能性は高い。これを明らかにするためにも，戸坂地区における本格的な発掘調査による詳細なデータの蓄積が長らく待たれていたのである。

注

1．『芸藩通史』巻三六所収の戸坂村絵図には茶臼城山，牛田村絵図では太平山と記載されている。また，現在地元周辺辺では西山，茶磨山，．牛田山等の呼び名がある。
2．広島市役所編『新修広島市史第１巻総説編』1961年
3．禅昌寺西遺跡発掘調査団『禅昌寺西遺跡発掘調査報告』1980年
4．広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983年
5．財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』1987年
6．広島県教育委員会「狐ケ城遺跡群」「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年
7．注２に同じ。
8．財団法人広島市歴史科学教育事業団『牛田早稲田遺跡発掘調査報告』1994年
9．広島県編『広島県史』考古編1979年
10．注２同じ。
11．上深川Ⅲ式土器の年代比定については様々な説がある。当報告書では弥生時代終末～古墳時代初頭と想定しているが，現段階で弥生時代から古墳時代への移行の過程が明らかにされていないため，便宜

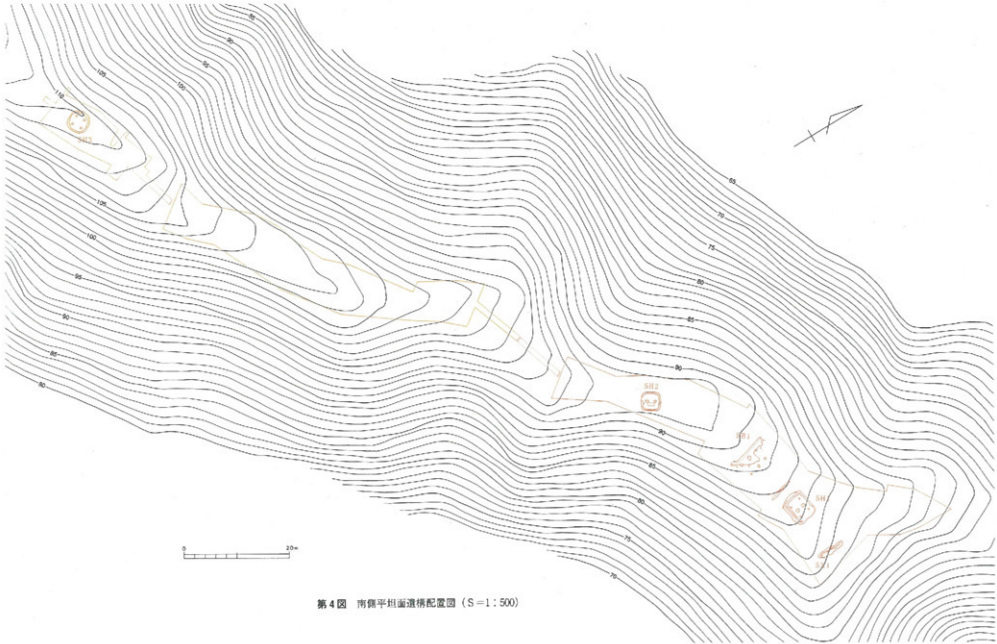
上，上深川Ⅲ式土器の時期に相当する遺跡までを弥生時代の遺跡として取りあげることとする。
広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988年
広島市教育委員会『岩上山田遺跡発掘調査報告』1988年

12. 広島県教育委員会「恵下山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年
13. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『梨ケ谷遺跡発掘調査報告』1998年
14. 未報告のため詳細は不明である。
15. 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』1990年
16. 財団法人広島市文化財団『大町七九谷遺跡群発掘調査報告』1999年
17. 広島市教育委員会『末光遺跡群発掘調査報告』1984年
18. 広島市教育委員会「長う子遺跡」「芳カ谷遺跡」「大谷遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』1984年
19. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『寺山遺跡発掘調査報告』1997年
20. 広馬県教育委員会「寺迫遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内堀蔵文化財発掘調査報告』1977年
21. 広島県教育委員会「山手遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年
22. 広島県教育委員会「西山·北山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査誄告』1977年
23. 広島市教育委員会『岩上山田遺跡発掘調査報告』1988年
24. 広島県教育委員会「大井遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年
25. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金川遺跡群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』1987年
26. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『大久保遺跡発掘調査報告』1992年
27. 現在，城北学園に遺跡出土の，弥生土器片62点（ミニチュア土器1，大型壺1，平底甕底部4，小型甕2を含む），須恵器3点（杯蓋1，坏身2）が保管されている。
広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』1990年
28. 広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』1990年
29. 注9に同じ。
30. 注2に同じ。
31. 注9に同じ。
32. 注26に同じ。
33. 広島市編『中山村史』1991年
34. 広島県教育委員会『西願寺山墳墓群』1974年
35. 注3に同じ。
36. 注3に同じ。
37. 潮見浩編『中小田古墳群』広島市教育委員会1980年
38. 注2に同じ。
39. 注2に同じ。
40. 長尾古墳群のうち第1号古墳は立地条件・規模が弘住第1号古墳に類似しており，弘住第1号古墳と

同時期程度（4世紀末～5世紀初頭）のものと考えられる。
広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983年

41. 広島市編『戸坂村史』1991年
42. 注2に同じ。
43. 桜ヶ丘古墳は出土遺物は皆無であるが，石棺の構成が神昌寺西遺跡A主体と類似していることから時期の近いことが考えられている。
注3に同じ。
44. 城北学園校長清水悦四郎氏の御教示による。
45. 注2に同じ。
46. 注2に同じ。
47. 他に，太田川上流の安佐北区矢口の辺りで太田川を渡っていたという説もある。
財団法人広島市歴史科学教育事業団『古路・古道調査報告』1992年
注2に同じ。
48. 広島市編『図説広島市史』1988年
米倉二郎・佐々木卓也「広島県内条里遺構図」広島県編『広島県史』原始・古代編付録三1980年

第３図　長尾遺跡周辺地形図（Ｓ＝1：2,000）



第4図　南錦平担面遺構配置図（S＝1：500）

第5図　北側平坦面遺構配置図（S＝1：500）

Ⅲ　遺構と遺物

調査の概要

本遺跡は茶臼城山の北側に延びる山脚から派生した尾根筋の一つに位置する。この尾根筋は，山脚からさらに北東へと派生し下った後，緩やかに北へ弧を描くように向きを変え，太田川に広がる戸坂川の扇状地へと下る。尾根筋の勾配は緩やかであるが，特に標高約111ｍから標高84ｍまでの約180ｍ（南側平坦面）と，標高約45ｍ付近から丘陵先端まで（北側平坦面）の傾斜が緩やかになっており，この間は比較的急な斜面となっている。広島市教育委員会による事前の試掘調査により，南側平坦面で住居跡が，北側平坦面では南端部で住居跡が，北半部から尾根先にかけて前方後円墳１基を含む３基の古墳が確認された。Ⅰ章で述べたように，当初は古墳群までが調査範囲となっていたが，その後現状保存することとなり開発範囲からはずれたため，調査を実施したのは南側平坦面全域と北側平坦面の南端から北へ約50ｍの範囲である。

調査結果，南側平坦面からは竪穴住居跡３軒（ＳＢ１～３・焼失住居１軒含む），掘立柱建物跡１棟（ＳＢ１），テラス状遺構１か所（ＳＸ１）を，北側平坦面からは竪穴住居跡１軒（ＳＨ４），テラス状遺構２か所（ＳＸ２～３），土坑１基（ＳＫ１），古墳２基（ＭＴ４・５），土壙墓１基（ＳＴ１）をそれぞれ確認した。このうち，古墳２基については，立地条件から長尾古墳群に属するものと考えられ，北側から順に長尾第４・５号古墳と呼称した。また遺物は，集落跡からは弥生土器（ミニチュア土器含む）・砥石が，古墳及び土壙墓からは土師器・須恵器が出土した。

１．弥生時代

(1)概要（第４・５図）

弥生時代の集落跡に伴う遺構は，南側平坦面の北端でＳＨ１・２，ＳＢ１，ＳＸ１を，南側平坦面南端でＳＨ３を，また北側平坦面でＳＨ４，ＳＫ１，ＳＸ２・３を確認した。また，遺物は弥生土器（ミニチュア土器含む）・砥石などが出土した。

(2)遺構

・ＳＨ１（第６図）

本住居跡は南側平坦面の北端部に位置する。遺存状態は極めて良好である。本住居跡は床面及び柱穴の状況から，少なくとも１回の建て直し若しくは拡張が行われていた。以下床面の低い方からａ・ｂと呼称し，述べることとする。

ＳＨ１ａは南壁を除いて完存しており，平面形状は長方形で，床面の規模は東西82㎝南北370㎝である。床面の最高所は標高86.40ｍである。標高は最大97㎝，壁溝は東辺を除いて遺存しており，幅10～20㎝深さ約12㎝である。床面からは12個のピットを確認した。こ

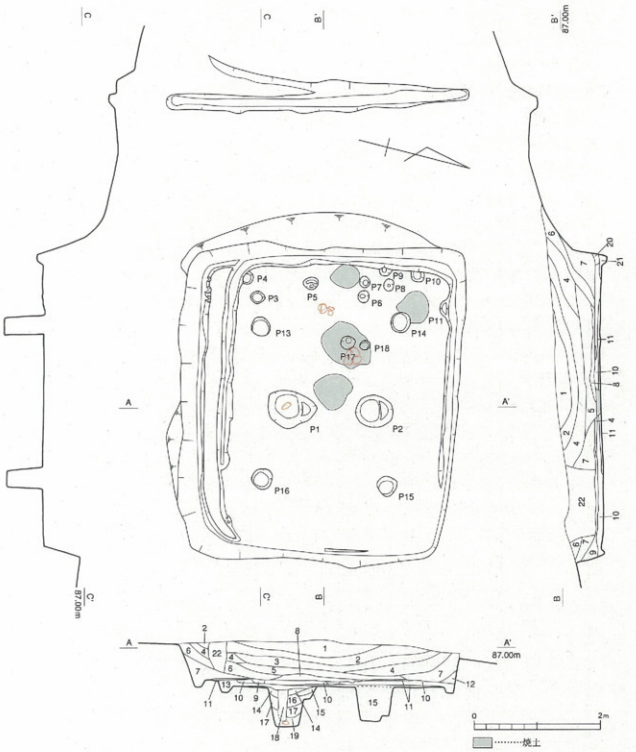
のうちＰ１・Ｐ２が，規模と本住居跡の短軸線上におおよそ位置することから，主柱穴と考えられる。規模はＰ１が底面直径36㎝深さ65～67㎝で，Ｐ２が底面直径34㎝深さ52～54㎝で，柱間距離は約140㎝である。Ｐ１には柱痕跡が残っており，これから使用された柱材の直径は14㎝以上と考えられる。さらに，Ｐ１底面直上から半分に割られた河原石が出土した。この河原石は，前述の柱痕跡の直下に位置すること，河原石の最高所の標高85.823ｍがＰ２の底面の標高85.822ｍとほぼ一致することから，柱穴の深さを調節するためのものと考えられる。Ｐ３～Ｐ12は直径８～18㎝深さ８㎝以下の極浅いピットで，西側壁溝付近を中心に分布する。同様の施設は他の遺跡でも確認されており，上屋構造を支える施設と考えられる1)。また，床面南東隅部から小規模なピット２個を確認した。その位置から，壁面の土留め用の施設に関するものと思われる。なお，床面の西縁中央と北西隅の２ヵ所で，直径40～50㎝のほぼ円形の焼土面を確認した。直上の埋土が炭化物を含んでいたことからも炉跡と考えられる。

ＳＨ１ｂは，東・西・北の各壁はＳＢ１ａと共通しており，南壁はＳＨ１ａの南壁から42㎝南に位置し，床面の規模は東西482㎝南北416㎝である。床面はＳＨ１ａの床面から約10㎝上に非常に堅緻な面として遺存していたため，ほぼ全面的に確認することができた。床面の最高所は標高86.49ｍである。壁高は最大91㎝，壁溝は東辺を除いて遺存しており，幅18㎝深さは構築時の状況が残っていると考えられる南側で５～９㎝である。本住居跡の床面からは，壁面との位置関係と規模から，主柱穴と考えられるＰ13～16を確認した。規模はいずれも底面直径22～27㎝深さ58～66㎝である。柱間距離は東西250～270㎝，南北200～220㎝である。また，南側壁構内の西端で小規模なピット３個を確認した。その位置から壁面の土留め用の施設に関するものと思われる。なお，床面中央から直径約60㎝深さ約10㎝の不正円形の掘り込みを，Ｐ13・Ｐ14間から長径85㎝短径65㎝深さ12㎝の長円形の掘り込みをそれぞれ確認した。いずれも埋土に焼土と炭化物を多量に含んでいたことから，炉跡と考えられる。特に，後者からは炉壁に張りつくように鉢（２）と高坏片（３）が出土した。出土状況は，鉢が正位で均一に３片に割れた状態で位置し，空いた空間を埋めるように高坏片が内面を上に向け位置していた。同個体と思われる破片が住居跡内の他の場所に確認できなかったことから，炉が使用されていたときに既にこの位置に置かれていたと考えられる。また，土器はいずれも内面が熱で変成している様であり，土器の上で火を用いた可能性がある。

ところで，ＳＨ１ａとｂの新旧関係については，前述のようにＳＨ１ｂの床面が堅緻な層としてＳＨ１ａの掘り方内でも確認できたことから，ＳＨ１ａが先行する。

なお，本住居跡の西側に接して東西約220㎝，南北約480㎝の平坦面が造り出されており，平坦面の西端に沿って幅約20㎝深さ約11㎝の溝を検出した。斜面に住居を作る際に壁の高さを揃える目的2)と住居内に水が流れ込まないための排水の目的を持った施設と考えられる。

本住居跡からは，ＳＨ１ｂの床面直上から弥生土器（１～５）の他，埋土中から弥生土器



土層説明

1. 黄褐色土
2. 黒褐色土
3. 暗黄褐色砂質土（粗）
4. 明褐色砂質土
5. 灰褐色砂質土（炭含む）
6. 灰褐色砂質土
7. 明灰褐色砂質土（粗）
8. 黄褐色砂質土
9. 褐色砂質土
10. 灰褐色砂質土（真砂崩れ，堅緻）
11. 赤褐色埴壌土
12. 灰褐色シルト質壌土
13. 明褐色砂質土（堅緻）
14. 明褐色砂質土（極堅緻）
15. 明褐色砂質土（～5mm細礫多量に含む）
16. 明灰褐色砂質土
17. 暗灰褐色砂質土
18. 淡灰色砂質土
19. 灰色シルト質壌土
20. 灰褐色砂質土（粗）
21. 褐色砂質土（粗）
22. トレンチ痕

第6図　SH１実測図（S＝1：60）

・ＳＨ２（第７図）

ＳＨ２はＳＨ１の西約27ｍに位置し，遺存状態は極めて良好である。平面形状は隅丸方形で，規模は１辺約370㎝である。床面の最高所は標高90.74ｍである。壁高は最大60㎝，壁溝は床面の南西側一部分・東隅を除くほぼ全周で遺存しており，幅約15㎝深さ２～12㎝である。

床面からは，規模及び位置から主柱穴と考えられるＰ１・Ｐ２を確認した。規模はＰ１が底面直径22㎝深さ89㎝，Ｐ２が底面直径21㎝深さ79㎝，柱間距離は185㎝である。さらに掘り方外側４隅からはＰ３～Ｐ６を確認した。規模はいずれも底面直径６～10㎝，深さ約20㎝の小規模なもので，位置から，上屋構造の先端部を固定する施設に関するものと考えられる。また，床面中央直上に長辺160㎝短辺90ｃｍ深さ４㎝の不整形の焼土面を確認した。さらに，その東南の床面からは長辺140㎝短辺40～55㎝深さ６～11㎝の長方形の掘り込みを確認した。埋土中には焼土と炭化物を多量に含んでいた。いずれも，位置とその状態から炉跡と考えられる。

ところで，本住居跡の東隅で，掘り方上端から床面へかけて扇形に広がり落ちる堅緻に締まった真砂土の層を確認した。規模は幅約60㎝奥行約70㎝で，床面から18㎝の高さに１段の段を有する。位置と形状から，階段的用途に使用された可能性がある。

なお，本住居跡からは遺物は出土しておらず，時期は不明である。

・ＳＨ３（第８～10図）

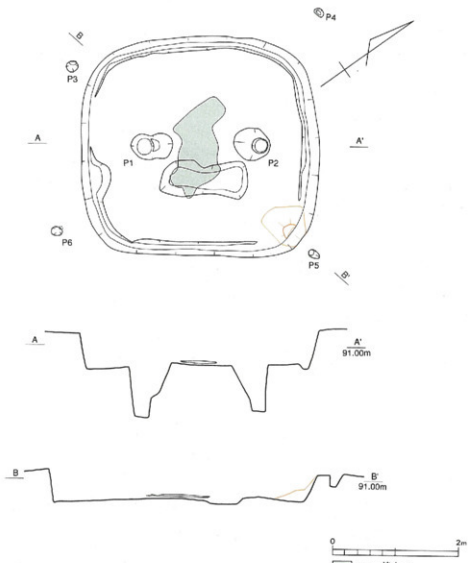
ＳＨ３は南側平坦面の南端に位置する。遺存状態は極めて良好で，掘り方内部からは多量の炭化材と焼土が出土し，焼失住居と考えられる。平面形状は円形で，規模は直径約400㎝である。床面の最高所は標高108.34ｍ，壁高は最大85㎝である。壁溝は床面の全周で遺存しており，幅約15㎝深さ約６㎝である。

床面から確認したピットのうち，壁との位置関係と規模からＰ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。規模はＰ１が底面直径28㎝，Ｐ２が底面直径30㎝，Ｐ３・Ｐ４が底面直径25㎝，深さはＰ２が59㎝，他は約72㎝である。各柱穴とも柱痕跡が確認でき，規模はＰ１が直径17㎝，Ｐ２・Ｐ４が直径14㎝，Ｐ３が直径11㎝である。柱間距離はほぼ平均しており，それぞれ約160㎝である。また床面のＰ３・Ｐ４の間から長径37㎝短径27㎝深さ９㎝の楕円形の掘り込みＰ６を，Ｐ４の南に直径25㎝深さ5.5㎝の円形の掘り込みＰ５を確認した。いずれも形状から炉跡と考えられる。

また，Ｐ１・Ｐ２と北壁に囲まれた床面直上に幅120～135㎝長さ210～230㎝高さ約15㎝の土壇状の盛り土を確認した。土質は柔らかな暗黄褐色砂質土からなる。遺構の表面全面は被熱して焼土に変化しており，焼失時の生活面と考えられる。位置・形状からベッド状遺構と考えられる。本住居跡の南隅床面の約10㎝上からは馬蹄状の焼土面を確認した。焼土面に囲まれた範囲内には炭化物が殆ど確認されなかった。

さて，前述のように本住居跡からは多量の炭化材・炭化植物遺体が出土した。これらの炭化材や炭化植物遺体については科学分析を実施している（第10図）。

炭化材はその検出位置と形状から以下の６種に細別できる。



第7図　SH２実測図（S＝1：60）

①掘り方上面から住居の中心に向かって緩やかに落ち込む径８～10㎝程の丸太状の材
②壁面に貼り付いた径６㎝程の材
③住居の中心付近上層部に南北方向に伸びて位置する径18㎝程の丸太状の材
④床面直上に位置する規則性の無い材
⑤ベッド状遺構の上に東西方向に伸びて位置する材
⑥壁面・床面に貼り付く，もしくは埋土中に見られるストロー状の植物遺体

①はその検出状況から垂木に用いた材と考えられる。②は壁面との間に焼土層を挟んでおり，炭化材が現在の位置に留まる以前に壁面が火を受けていたと考えられる。このことから，②は土留め用の材とは考えられない。むしろ，①と②の材は分離してはいるものの，形状や間隔的に連続していることから，同一の用途（垂木）に用いられたと考えられる。①②の材は下側の炭化が著しく，上側が炭化していない状態であった。③は検出位置とその規模から，梁材と考えられる。④は規則性がなく細かな材が多いことから，屋根下地が上屋より早く崩壊したものと考えられる。なお、①②③④の材は科学分析の結果，樹種はブナ科シイノキ属のツブラジイとスダジイが用いられていた。一方，⑤は材は殆とがシイノキ属の本住居において，唯一ハイノキ科ハイノキ属ハイノキ節であった。材の途切れているところは粉状の炭化物が続いていたことから，東壁から西壁まで長さのある材であったと考えられる。残存状況の良好な東壁側で材は４本確認できた。ベッド状遺構の材の乗っていた面が被熱していたこと，西壁側の材の一部が掘り方上面近くに位置していたことから，焼
失前は少なくとも西側が掘り方よりも上に位置していたと考えられる。⑥は本住居内のいたる所で見受けられ，中でも垂木と考えられる①②材の上に位置するものが多かった。科学分析の結果，炭化植物遺体はイネ科タケ亜科に同定され，外観的特徴からササ類と考えられる。方向性はなかったが，状況から屋根に付随するものと考えられる。

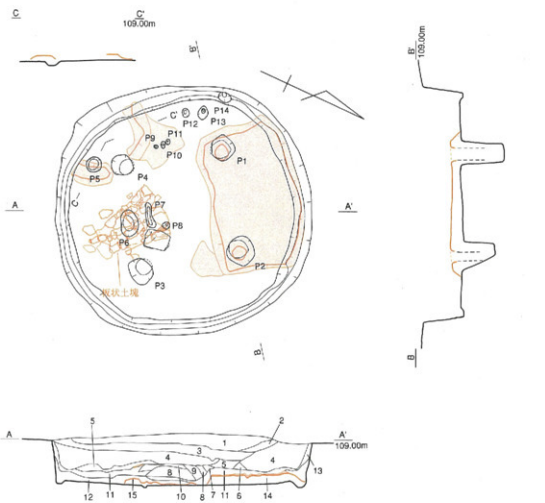
なお，Ｐ３・Ｐ４間の床面直上から，長さ120㎝短幅50㎝長幅90㎝の扇形に広がる平板状の土塊が数枚重なった板状土塊を確認した。板状土塊の胎土中に草本類と考えられる植物遺体の圧痕が多数確認できた。科学分析の結果，圧痕からは単体のススキ属単細胞珪酸体がわずかに確認されたことから，圧痕を残した植物の中にススキ属が混入していた可能性がある。また，一番上側の顕著に硬化していた部位は550～900℃の被熱があり，それ以下の部位は少なくとも550℃以上は被熱していない，あるいは全く熱を受けていないという分析結果が出ている。原形，用途等については叫」らかにできなかった3)。

また，板状土塊の東端下部から，短幅30㎝長幅40㎝厚さ３～８㎝の板状の石を検出した。石の表面は被熱により赤変しており，’下面（床側面）には直径約20㎝の円形状にススが付着していた。用途については明らかにできなかった。

なお，埋土中から弥生土器がわずかに出土したが，いずれも細片でその時期は不明である。

・ＳＨ４／ＳＸ２（第11図）

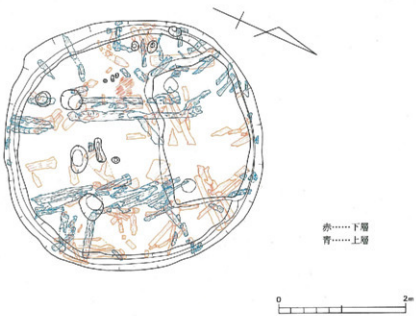
ＳＨ４は北側平坦面の南端から約１０ｍ北に位置する。壁面の南半分は流失している。平



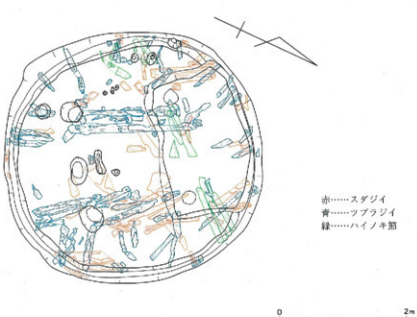
土層説明

1．明褐色砂質土
2．明褐色砂質土（3まじり）
3．茶褐色砂質土
4．黄褐色砂質土
5．黄褐色砂質土（3まじり）
6．淡黒色砂質土
7．黄褐色砂質土（炭少量含む）
8．黄褐色砂質土（炭微量含む）
9．黄褐色砂質土（炭含む）
10．暗黄褐色砂質土
11．黒色砂質土（炭多量に含む）
12．黒黄褐色砂質土（炭含む）
13．赤褐色砂質土（真砂崩れ焼土）
14．暗黄褐色砂質土
15．板状土塊

第8図　SH3実測図（S＝1：60）



第9図　SH３炭化材層別出土状況実測図（S＝1：60）



第10図　SH３炭化材樹種別出土状況実測図（S＝1：60）

面形状は隅丸長方形で規模は南北400㎝東西455㎝である。床面の最高所は標高44.52ｍである。壁高は最大80㎝，壁溝は全周で遺存しており幅12～18深さ４～16㎝である。床面の中央部は周囲よりも２～10㎝低くなっており，その規模は長辺320㎝短辺180～245㎝である。本住居跡の南側には平坦面が造り出されており，平坦面の東半部はＳＸ２の北端と重複している。規模は現状で東西約200㎝南北約200㎝，平坦面の南側に沿って幅約30㎝深さ２～８㎝の溝を検出した。ＳＨ１の西側平坦面と同様，本住居跡に付随すると考えられる。斜面などに住居を作る際に壁の高さを揃える目的と4)，住居内に水が流れ込まないための排水の目的をもった施設と考えられる。本住居跡の床面からは９個のピットを確認した。壁面との位置関係及び規模から，主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４である。

各主柱穴の規模は，Ｐ１が底面直径16㎝深さ47㎝，Ｐ２が底面長径30㎝短径26㎝深さ71㎝，Ｐ３が底面直径21㎝深さ62㎝，Ｐ４が底面長径27㎝短径21㎝深さ60㎝である。柱間距離は南北間が235～245㎝，東西間が260～270㎝である。その他のピットはいずれも主柱穴と壁面との間に位置する底径４～12㎝深さ３～10㎝程の小規模のもので，同様の施設は他の遺跡でも確認されており，上屋構造を支える補助的な施設と考えられる5)。

ＳＸ２は北端をＳＨ４の南側平坦面の東半分と重複して位置する。平坦面は尾根の東側斜面に平行するように斜面を55～100㎝程度掘りこんで造られている。平坦面の東側は流失しており，規模は現状で幅530㎝奥行き285㎝である。平坦面の最高所は標高45.78ｍである。平坦面の壁際に沿って壁溝状の遺構を確認した。規模は東西180㎝南北350㎝幅18～28㎝深さ３～９㎝である。平坦面からは，壁面との位置関係と径の規模から主柱穴と考えられるＰ10～Ｐ13を確認した。各柱穴の規模はＰ10が底面直径約18㎝底面標高45.137ｍ，Ｐ11底面直径15㎝底面標高45.177 7ｍ，Ｐ12が底面直径30㎝底面標高45.287ｍ，Ｐ13が底面長径27㎝短径20㎝底面標高45.377ｍである。柱間距離はＰ10－Ｐ11間が140㎝，Ｐ11－Ｐ12間が180㎝，Ｐ12－Ｐ13間が150㎝である。壁溝をもつこと，平坦面・柱穴の規模等，住居跡に相当する規模・施設をもっていることから，本遺構は住居に匹敵する構造を有していたと考えられる。

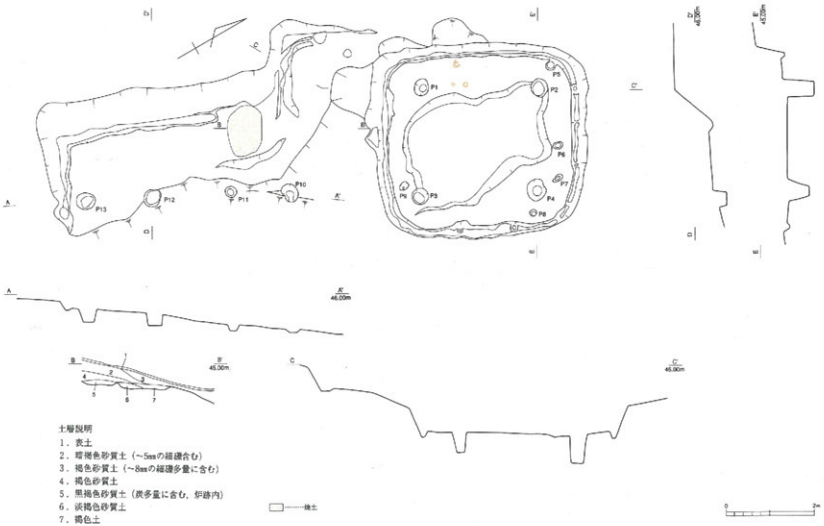
なお，ＳＨ４とＳＸ２の重複する場所から長径115㎝短径78㎝深さ８㎝の楕円形の掘り込みを確認した。埋土中に炭化物や焼土を含んでいることから炉跡と考えられる。遺構の切り合い関係からＳＨ４とＳＸ２より新しく造られたと考えられる。

ところで，前述のようにＳＨ４とＳＸ２の一部は重複しているが，各遺構の新旧関係は明らかにはできなかった。

ＳＨ４の床面直上からは弥生土器（９～11）・砥石（18）の他，埋土中からは弥生土器（12～14）が出土した。その形態から上深川Ⅲ式に属すると考えられる。

・ＳＢ１（第12図）

ＳＢ１はＳＨ１の西約６ｍに位置する。規模と位置関係から，主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ６である。規模は底面直径30～40㎝で，底面標高88.66～88.72ｍとほぼ一定している。桁行きの柱間距離は約190～210㎝，梁行きの柱間距離は240㎝である。柱穴の配置から，棟



第11図　SH４・SX２実測図（S＝1：60）

方向はＮ17°Ｗと推定され，桁行約390㎝梁行約240㎝の１間×２間の建物跡と考えられる。また，Ｐ７はＰ３に接して位置し，規模は底面直径28㎝で、底面はＰ３の底面から約10㎝上に段を有する状態に伎置する。Ｐ８はＰ４に接して位置し，規模は底面長径24㎝短径13㎝の長円形で底面標高はＰ４と同じである。Ｐ７・Ｐ８ともに棟方向からずれており，Ｐ８が小規模であるなど建て替えに伴うものとは考えられず，それぞれの柱を補助する役割をもっていたと考えられる。また，西側柱穴列の約90㎝山側（西側）に平行して幅12～27㎝長さ510㎝深さ10～20㎝の溝状の掘り込みを検出した。同様の施設は他の遺跡でも確認されており，建物に伴って掘り込まれた排水施設と考えられる6)。

柱穴のうち，Ｐ１の埋土中からほぼ完形の土器（15）が出土した。土器はＰ１の中心部から出土したことから，廃絶後に埋納されたもので，何らかの祭祀に伴うものと思われる。その形態から，上深川Ⅲ式に属すると考えられる。

・ＳＸ１（第13図）

ＳＸ１はＳＨ１の東約７ｍに位置している。尾根筋に直交して斜面を30～50㎝程度掘りこんで造られており，規模は幅520㎝奥行き140㎝である。主要な平坦面の規模は幅450㎝奥行き46～97㎝最高所は標高85.45ｍである。この他に壁際に，主要な平坦面から10～20㎝高所に小規模な平坦面２ヶ所と，溝状遺構を確認した。

平坦面からは，規模や深さから柱穴と考えられるＰ１・Ｐ２を確認した。規模はいずれも底面直径14㎝，底面標高はＰ１が84.97ｍ，Ｐ２が84.67ｍで柱間距離は150㎝である。柱穴が住居跡の主柱穴に比べ小規模なことから，掘り方上部から簡易な屋根を架けていたと思われる。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

・ＳＸ３（第14図）

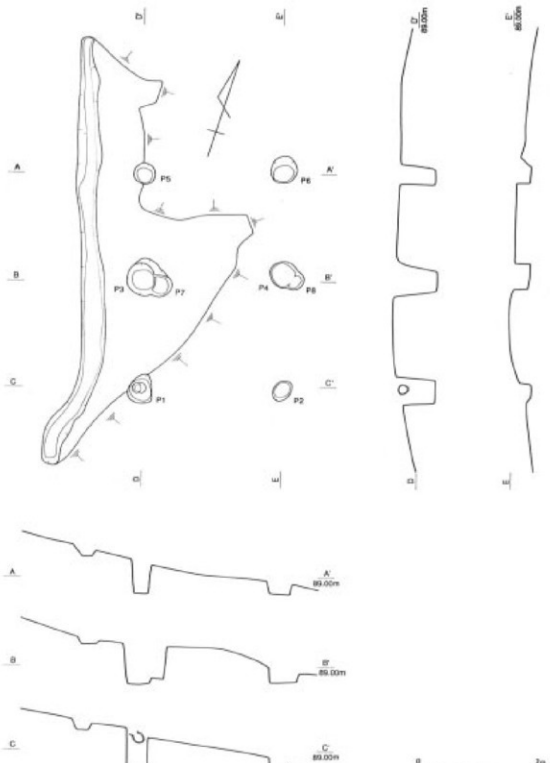
ＳＸ３はＳＨ４の北約６ｍに位置している。南側斜面に平行して斜面を20～30㎝掘りこんで造られている。平坦部の東側から南側をパイロット道路により，西側を土構墓によって削平されている。主要な平坦面は現状で東西２つに分かれており，規模は東側平坦面が幅約300㎝，奥行約100㎝最高所は標高46.82ｍ，西側平坦面が幅約200㎝奥行約100㎝最高所は標高45.43ｍである。

本遺構の東西それぞれの平坦面の埋土中から土器（16・17）が出土した。

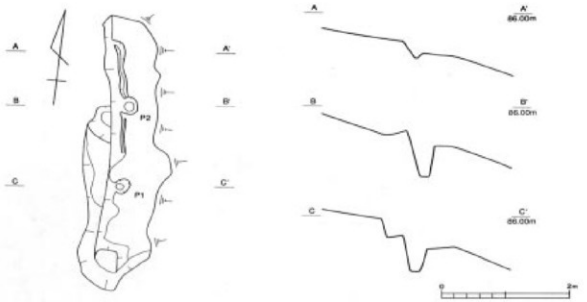
・ＳＫ１（第15図）

ＳＫ１はＳＨ４の北約１ｍに位置する。平面形状は長方形で，底面の規模は南北93㎝東西124㎝深さ約30㎝である。床面中央部には土器の細片が敷き詰められた様な状況で出土した。土器は床面に接しており，使用時もしくは廃棄時の状態と考えられる。

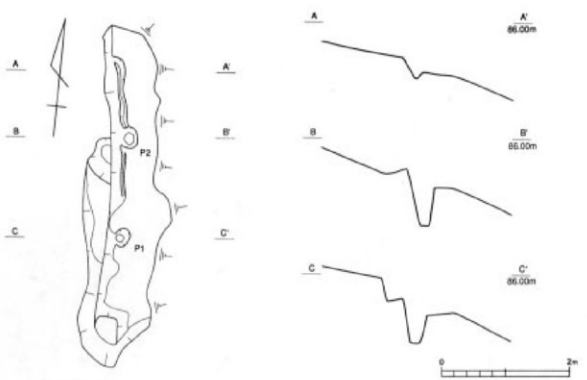
ところで，ＳＨ４は掘り込みの深さから，掘り方上面はほぼ築造時の状況を保っていると考えられ，ＳＨ４に近接して位置する本遺構も同様に築造時の状況をほぼ保っている可能性が高い。以上のことから，本土坑は通常の貯蔵穴用土坑に比べ掘り込みが浅く，貯蔵穴以外



第12図　ＳＢ１実測図（Ｓ＝１：60）



第13図　ＳＸ１実測図（Ｓ＝１：60）



第14図　ＳＸ３実測図（Ｓ＝１：60）

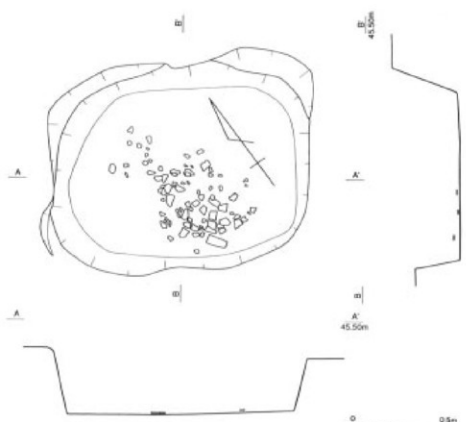
の用途に用いられたと考えられる。なお，土器はいずれも細片で風化が著しく時期を明らかにすることはできなかった。

(3)遺物

本遺跡の弥生時代の遺構からは，土器・砥石が出土した。以下，各遺物について述べる。なお，個々の土器の詳細は後掲する第１表出土土器観察表（１）弥生土器を参照されたい。

○弥生土器（第21図１～第22図17）

弥生時代の遺構から出土した土器の器種は甕・鉢・高坏・小型器台・ミニチュア土器などである。甕形土器は，殆どが口縁部は「く」の字状に外反するもので，広島市域の弥生時代後期の指標である上深川式土器に属するものと考えられる。上深川式土器は主に以下の３型式に分けられている7)。



第15図　ＳＫ１実測図（Ｓ＝１：20）

Ⅰ式：口縁部屈曲点に比べ口縁端部が明らかに厚い。口縁端部は平らに仕上げられ，多くは３条程度の凹線が施されている。口縁部と体部は屈曲点よりも下で接合されており，この部分の内面が厚くなっている。底部は比較的厚く平底もしくは窪み底である。

Ⅱ式：口縁部屈曲点と口縁端部の厚みはほぼ同じであるが，一部は端部直下を強くつまむことで一見厚く仕上げているものもある。口縁端部は平らに仕上げられ，無紋か２条程度の凹線が施されている。口縁部と体部は屈曲点付近で接合されており，これに伴い屈曲点付近の内面が厚くなっている。底部はⅠ式に比べ薄い。

Ⅲ式：口縁部は外に強く湾曲し，口縁部屈曲点に比べ口縁端部が薄く，端部は丸く仕上げられている。底部の厚さは体部とほぼ等しく，平底を残すものは殆ど無い。口縁部と体部は屈曲点付近で接合されているが，Ⅱ式と異なり外面が厚くなっている。

このうちⅢ式は，さらに古段階と新段階の２期に分類することができる。Ⅲ式古段階は外面には接合時の粘土痕跡が比較的よく残っており，口縁部屈曲点付近に比較的厚みをよく残している。底部は最大径付近に比べやや厚い。一方，新段階は口縁部接合の痕跡が極めて希薄となり内外面に接合粘土の痕跡をわずかに残すもののほぼ均等な厚みとなり、底部まで薄く仕上げられている。

以上から本地点の土器を分類すれば，Ⅰ式・Ⅱ式に属するものは無く，Ⅲ式のみに属すると考えられ，その多くが新段階に相当すると考えられる。本遺跡の甕形土器は，弥生時代終末から古墳時代初頭の極限られた時期に作られたものと考えられる。

なお，ＳＨ１から出土した（２）はいわゆる庄内系鉢であり，（８）は北部九州系の小型器台と酷似している8)。また，ＳＸ３から出土した（17）は「いわゆる山陰系土器」である9)。

○砥石（第22図18）

ＳＨ４埋土中から出土した。全長81㎜最大幅30㎜厚さ19㎜の四角柱状の石の２面を利用している。使用面は１面が磨耗し窪んでいる。使用面の一部に線状痕が見られる。

注

1．梨ケ谷遺跡等から同様の施設が確認されている。
財団法人広島市歴史科学教育事業団『梨ヶ谷遺跡発掘調査報告』1998年

2．梨ヶ谷遺跡，城ノ下Ａ地点遺跡等から同様の施設が確認されている。
財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下Ａ地点遺跡発掘調査報告』1991年

3．板状土塊と床面の間に炭化物は確認できず，土葺きの屋根が焼け落ちたとは考えられない。その出土状況が平尾遺跡・黒谷遺跡・大町七九谷遺跡群で土している「甑形土器」の出土状況と類似していることから，火災により表面が被熱した末焼成の「甑形土器」の可能性が考えられる。
財団法人広島市歴史科学教育事業団『平尾遺跡発掘調査報告』1994年
財団法人広島市歴史科学教育事業団『黒谷遺跡発掘調査報告』1995年
財団法人広島市歴史科学教育事業団『大町七九谷遺跡発掘調査報告』1999年

4．注2に同じ。
5．注1に同じ。
6．寺山遺跡で同様の施設が確認されている。
　財団法人広島市歴史科学教育事業団『寺山遺跡発掘調査報告』1997年
7．広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡発掘調査報告」1988年
8．柳田康雄氏の北部九州土師器編年の1a期に見られる庄内期の柱状部を持つ小型器台と酷似している。
　柳田康雄「九州」『古墳時代の研究』6土師器と須恵器　雄山閣　1991年
9．妹尾周三「いわゆる「山陰系土器」の検討－矢谷古墳出土土器について－」『研究輯録』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1991年

第１表　出土土器観察表(1)弥生土器

（［　］：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
1	甕	ＳＨ１	器高　13.7 口径　16.8 胴部最大径 13.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。 底部は丸底。	外面　口縁から胴部1/2にかけてナデ以下ヘラ削り後ナデ。 内面　ナデ。	色調　赤褐色 胎土　～3㎜の石英・長石含む 焼成　良好
2	鉢	ＳＨ１	器高　9.2 口径　21.9	口縁端部はやや外反し尖り気味におさめる。	外面　口縁部損傷著しく不明。底部から胴部1/2ヘラ削り後ナデ。 内面　ナデ。底部付近に指頭圧痕。	色調　褐色、口縁から胴部2/3にかけて被熱による赤色化 胎土　～4㎜の長石多く含む 焼成　良好
3	高坏	ＳＨ１	口径　［29.0］	高坏の坏部。口縁部は外湾する。	外面　ナデ後ヘラ磨き。 内面　ヘラ削り後ナデ。脚との接点に指頭圧痕	色調　赤褐色 胎土　～2㎜の石英多く含む 焼成　良好 スス付着
4	不明	ＳＨ１	底径　4.0	底部は平底。	外面　ナデ。 内面　底部指頭圧痕。胴部ヘラ削り。	色調　赤褐色 胎土　～3㎜の砂粒含む 焼成　良好
5	鉢？	ＳＨ１	器高　2.5 口径　6.0	ミニチュア土器。構口縁部はほぼ水平に外反し、端部はやや平らにおさめる。	外面　ナデ。頸部にツメ跡痕あり。 内面　ナデ。指頭圧痕。	色調　暗赤褐色 胎土　口縁内面黒色 焼成　良好
6	甕？	ＳＨ１ 埋土	器高　2.5 胴部最大径 2.3	ミニチュア土器。口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや丸くおさめる。	外面　ナデ。 内面　ナデ。	色調　褐色 胎土　密 焼成　良好 内面にスス付着
7	鉢？	ＳＨ１ 埋土		底部は尖り気味。	外面　ナデ。 内面　ヘラ削り後ナデ。	色調　暗赤褐色 胎土　密 焼成　良好
8	小型器台	ＳＨ１ 埋土	器高　5.6 口径　8.1 胴部最大径 6.8	脚柱をもつ台部に逆「八」の字状の受け部が載る。口縁端部丸くおさめ、脚端部平らにおさめる。	外面　受け部、脚部ナデ。脚柱ヘラ削り後ナデ 内面　ナデ。	色調　淡赤褐色 胎土　～2㎜の長石含む ～2㎜の石英多く含む 焼成　やや軟調
9	甕	ＳＨ４	口径　［14.5］	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面　ナデ。 内面　ナデ。	色調　褐色 胎土　～3㎜の石英含む 焼成　良好 外面にスス付着

（［ ］：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
10	甕	SH4	口径 [16.5] 胴部最大径 [17.7]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ以下ヘラ削り。	色調 褐色 胎土 ～2㎜の長石多く含む 焼成 良好 外面にスス付着
11	不明	SH4	底径 4.8	底部は平底。	外面 ナデ。ヘラ磨き。 内面 ナデ。底部に指頭圧痕。	色調 濃赤褐色 胎土 ～2㎜の長石・石英多く含む
12	甕	SH4 埋土	口径 [14.5]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味におさめる。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 ～2㎜の長石・石英多く含む 焼成 良好
13	甕	SH4 埋土	口径 [16.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味にやや内傾する。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ以下ヘラ削り。	色調 淡褐色 胎土 密，金雲母多く含む 焼成 良好 口縁外面スス付着
14	小型壺	SH4 埋土	口径 9.2 胴部最大径 7.0	口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。底部は丸底。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 暗褐色 胎土 密，～4㎜の石英含む 焼成 良好
15	甕	SB1	器高 21.4 口径 16.7 底径 1.7 胴部最大径 17.2	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめた痕跡あり。底部はわずかに平底。	外面 ナデ。風化著しい。 内面 口縁部から頸部ナデ以下ヘラ削りの痕跡あり。	色調 淡赤褐色 胎土 ～2㎜の長石・～3㎜の石英多く含む 外面にスス付着
16	甕	SX3	口径 [15.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや平たくやや外傾する。	外面 風化著しく不明。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 明黄褐色 胎土 ～2㎜の長石・石英多く含む 焼成 良好
17	壺	SX3		外反する口縁に緩やかに外湾する立ち上がり部が接合する複合口縁。端部はやや尖り気味におさまる。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。	色調 黄褐色 胎土 金雲母多く含む 焼成 やや軟調

２．古墳時代

(1)概要（第５図）

古墳時代の遺構は，北側平坦面上に位置し，調査区の北端からＭＴ４・５を，調査区のほぼ中央からＳＴ１をそれぞれ確認した。いずれも調査前の地表観察では，その存在は確認できない状態であった。なお，これらの遺構に伴い土師器・須恵器を確認した。

(2)ＭＴ４（第16・17図）

概要

ＭＴ４は調査区の北隅に位置している。古墳は，尾根筋に直交する２本の溝を地山まで掘り込んで周溝とし，それらに挟まれた区域を墳丘としている。墳形は南北にやや長い方形を呈している。ただし，墳丘上部は後世の地形改変の結果，地山まで削平を受けており，墳丘がどの程度の高さを呈していたのかは不明である。墳丘の規模は現状で東西10.3ｍ南北9.3ｍで，墳頂平坦面は現状で標高47.40ｍである。周溝の規模は現状で北側部分が長さ約570㎝幅176㎝深さ約20㎝で，南側部分が長さ約500㎝幅215㎝深さ32㎝である。土層観察によると明確な盛り土の確認はできなかったことから，墳丘の殆どは地山削り出しによって成形されていたと考えられる。なお，埋葬主体は確認できず，本古墳に明確に伴う遺物も確認できなかった。

(3)ＭＴ５（第19図）

概要

ＭＴ５はＭＴ４の南側約17ｍに位置している。後世の著しい地形改変の結果，墳丘の大半を失っており，北側の周溝の一部のみが遺存していた。周溝は円弧状を呈しており，規模は現状で長さ約520㎝幅60～80㎝深さは最深部で30㎝である。周溝は本古墳で最も高い北側の面で確認されており，周溝の端が尾根の傾斜変換点に達していないことから，古墳を全周していた可能性もある。周溝の形状から直径7.5ｍ程の円墳であったと考えられる。埋葬主体は確認できなかった。

なお，周溝西端から土器が出土しており，出土状況から供献品であった可能性が高い。

遺物

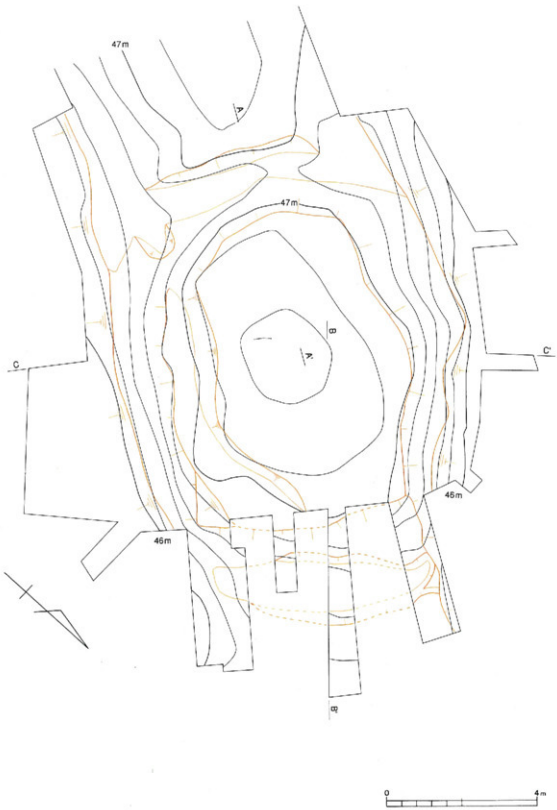
周構内埋土からは多量の土師器片と若干の須恵器片が出土したが，殆どが細片で，器形の復元できるものは土師器１点（甕）及び須恵器１点（坏蓋）のみである。

ａ．土師器

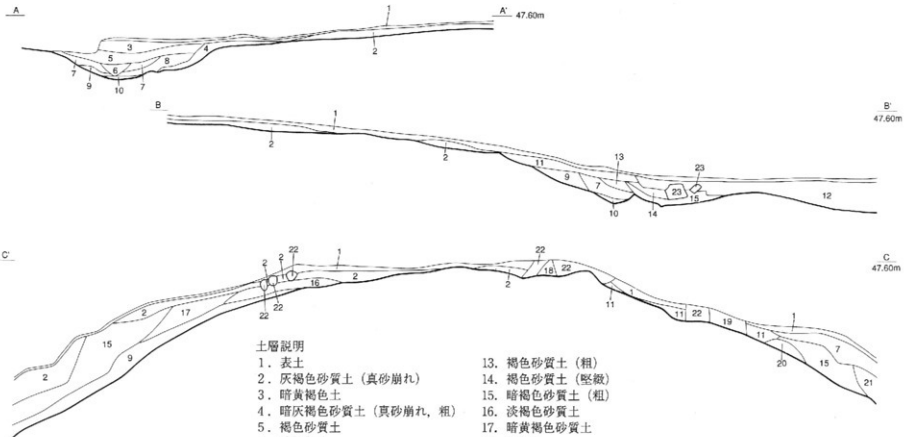
甕（第22図19）

口縁部が出土している。口縁部は比較的厚くやや内傾気味に「く」字状に外反し，端部は半らに収める。外面頸部以下にハケ目が施される。

第16図　MT 4 実測図（調査前，S＝1：100）



第17図　MT 4 実測図（調査後，S＝1：100）



土層説明

1．表土
2．灰褐色砂質土（真砂崩れ）
3．暗黄褐色土
4．暗灰褐色砂質土（真砂崩れ，粗）
5．褐色砂質土
6．暗褐色土
7．褐色砂質土
8．灰黄褐色砂質土（粗）
9．黄褐色砂質土
10．灰色砂質土（真砂崩れ）
11．褐色土（山道下層，堅緻）
12．トレンチ痕
13．褐色砂質土（粗）
14．褐色砂質土（堅緻）
15．暗褐色砂質土（粗）
16．淡褐色砂質土
17．暗黄褐色砂質土
18．褐色土
19．根痕
20．黄褐色砂質土（極堅緻）
21．黒褐色砂質土（粗）
22．根
23．石

第18図　MT 4 土層断面図（S＝1：50）

b．須恵器

坏蓋（第22図20）

扁平な天井部を呈していると考えられ，水平方向に短く伸びる稜をもつ。口縁はわずかに外側に開き，端部内面は凹面を呈し外側にやや開くなど，田辺陶邑編年1)の「ＴＫ208型式」，中村陶邑編年2)の「Ⅰ型式3段階」の特徴をもっており，5世紀中葉頃のものと考えられる。

(4)ＳＴ1（第20図）

概要

ＳＴ1はＭＴ5周溝東端の南約4ｍに位置する。平面形状は長方形で，規模は底面で長さ224.4㎝，幅は西小口側で48㎝，東小口側で60㎝，東隅上半は流失しているが深さは最大50㎝で底面は東に緩やかに傾斜している。主軸はＮ43°Ｗをとる。墓壙内東隅の埋土からは，須恵器3点が重なる状態で出土した。いずれも器形は坏蓋で，逆位に位置する須恵器坏蓋（23）の上に正位に須恵器坏蓋（22）が位置し，それらの横に須恵器坏蓋（21）が倒立する状態で出土した。その出土状況及び器種からＳＴ1に供献されたものと考えられるが，出土状況から検出時の状態が供献時の状態というよりは木棺が用いられ，その上にこれらの須恵器が置かれたものが，木棺の腐朽に伴って落ち込んだものと考えられる。

遺物

遺物は埋土中から須恵器3点（坏蓋）が出土した。

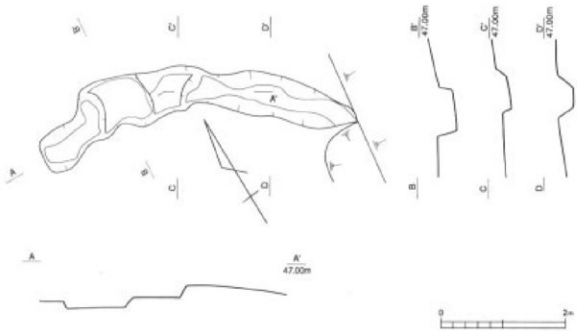
a．須恵器

坏蓋（第22図21～23）

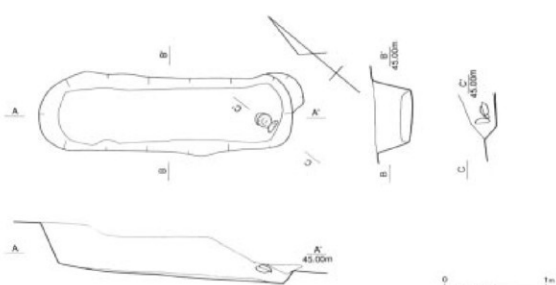
いずれも，やや平坦な天井部を呈し，口縁部との境の稜は不明瞭である。口縁部は外へ開きながら下降し，端部内面の段は殆ど形骸化している。口径は14.3～4.7㎝，器高は4.4～4.6㎝である。いずれも，田辺陶邑編年の「ＴＫ43型式」，中村陶邑編年の「Ⅱ型式4段階」の特徴をもっており，6世紀後葉頃のものと考えられる。

注

1．平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群』Ⅰ 1966年
　田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
2．中村浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』柏書房 1981年



第19図　ＭＴ５周溝実測図（Ｓ＝１：60）

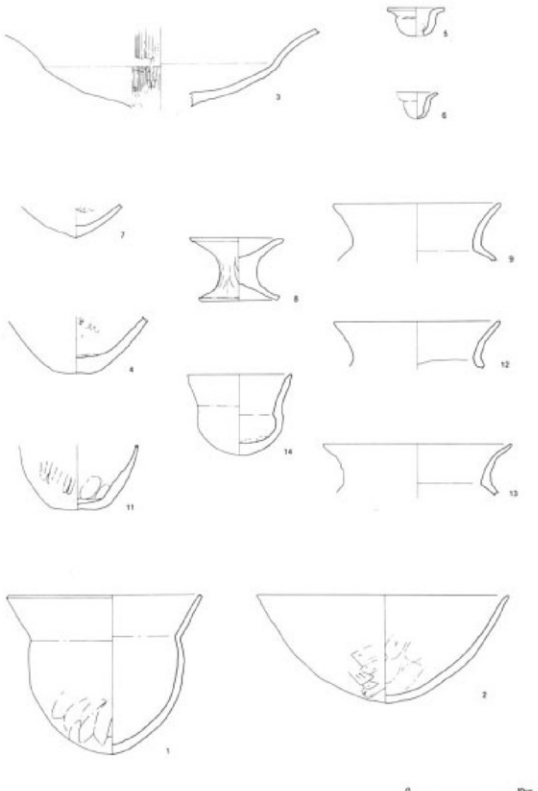


第20図　ＳＴ１実測図（Ｓ＝１：40）

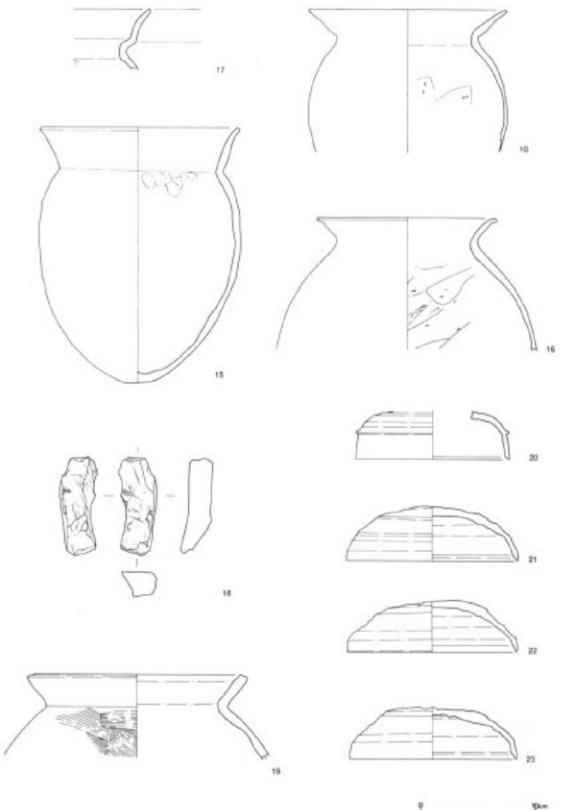
第２表　出土土器観察表(2)土師器・須恵器

（[　]：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
１９	甕	ＭＴ５ 周溝埋土	口径　[17.7]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。	外面　口縁ナデ以下ハケ目 内面　ナデ	色調　赤褐色 胎土　～3㎜の石英・金雲母含む
２０	甕	ＭＴ５ 周溝埋土	器高　[4.2] 口径　[13.4]	口縁部は直線的に下がり、端部内面に凹面を有する。稜は尖り気味。天井部は平坦。	外面　天井部回転ヘラ削り後ナデ。 内面　回転ナデ。	色調　青灰色 胎土　精緻，～2㎜の石英わずかに金雲母多く含む 焼成　堅緻
２１	坏蓋	ＳＴ１ 埋土	器高　4.6 口径　14.7	天井部はやや丸みをもつ。口縁部との境目は不明。口縁部はひらき気味に下りる。端部な内面の段はわずかに窪む。	外面　上部から1/2ヘラ削り以下回転ナデ。 内面　天井面1/3横ナデ、以下回転ナデ。	色調　淡灰色 胎土　～4㎜の砂粒・金雲母多く含む 焼成　堅緻
２２	坏蓋	ＳＴ１ 埋土	器高　4.4 口径　14.6	天井部はやや平坦につくる。口縁部との境は不明瞭で、「ハ」の字状に開き、端部は垂直に下りる。	外面　上部から1/2ヘラ削り以下回転ナデ。 内面　回転ナデ。	色調　青灰色 胎土　～3㎜の砂粒・金雲母多く含む 焼成　堅緻
２３	坏蓋	ＳＴ１ 埋土	器高　4.4 口径　14.3	天井部は平坦につくる。口縁部との境目は不明瞭。口縁部はやや開き気味に直線的に下り、口縁部内面の段は殆どない。	外面　上部から1/2ヘラ削り以下回転ナデ。 内面　回転ナデ。	色調　淡青灰色 胎土　～2㎜の砂粒・金雲母多く含む 焼成　堅緻



第 21 図　尾長遺跡出土遺物実測図(1)（S＝1：3）



第22図　尾長遺跡出土遺物実測図(2)（S＝1：3）

Ⅳ　ま　と　め

長尾遺跡では，弥生時代終末から古墳時代初頭の集落跡と古墳時代の古墳群を確認した。ここでは，それぞれの時代ごとに若干考察を加えまとめとしたい。

1．長尾遺跡の集落跡について

本遺跡の位置する尾根筋は南側と北側の２つの平坦面を持つ。遺構は南側平坦面では南端からＳＨ３を，北端からＳＨ１・２，ＳＢ１，ＳＸ１を，また北側平坦面からはＳＨ４，ＳＸ２・３，ＳＫ１を確認した。つまり，遺構は尾根上の３か所に偏在していることになる。このような立地は，遺構の確認されなかった南側平坦面のＳＨ２とＳＨ３の間（標高107ｍから標高92ｍの約95ｍの区間）は岩盤・岩脈が露出し土地を加工しにくいことから，土地の加工が容易な限られた場所を使用したためと考えられる。

遺構のうち，ＳＨ１，ＳＨ４，ＳＢ１，ＳＸ３からは土器が出土しており、いずれも上深川Ⅲ式（新段階）に相当する遺構であると考えられる。また，調査区埋土中のものも含めて，出土した土器はいずれも上深川Ⅲ式（新段階）の時期であり，他の時期の特徴をもつ土器が出土しなかった。このことから，時期の不明な他の遺構も，上深川Ⅲ式（新段階）の弥生時代終末～古墳時代初頭の短期間に営まれた可能性が高い。竪穴住居跡の平面プランは隅丸長方形４本柱（ＳＨ１ｂ・ＳＨ４），隅丸長方形２本柱（ＳＨ１ａ），隅丸方形２本柱（ＳＨ２），円形４本柱（ＳＨ３）の４種類があるが1)，平面プランからは時期的な変遷を追うことはできなかった。なお，ＳＨ１，ＳＢ１，ＳＸ１は同一の軸方向をもっており，ほぼ同時期に営まれた可能性がある。

以上のことや，遺構の立地・密度を考えると長尾遺跡は小規模な遺跡であり，上深川Ⅲ式の極限られた時期に数軒の住居が営まれた集落と考えられる。Ⅱ章で述べた通り，太田川下流域で確認された他の弥生跨代の集落を見ると，①十数軒以上の住居跡をもち，弥生時代中期後葉もしくは上深川Ⅰ式から上深川Ⅲ式までの２期以上にまたがって存続する大規模なもの，②１軒から数軒の住居が営まれた小規模なものに大別できる。本遺跡は，後者に属する小規模な集落と同様の一時期のみの集落遺跡であると考えられる。

なお，東隣りの尾根に位置する城北学園グラウンド遺跡からは，上深川Ⅰ～Ⅲ式の時期の土器が出土している。このことから，城北学園グラウンド遺跡は弥生時代後期を通して，集落が存在した可能性がある。以上から，戸坂地区も他の太田川下流域同様に弥生時代後期を通じて集落が存在していたと考えられる。

2．ＳＨ３（焼失住居）についての考察

Ⅲ章で述べたように，炭化材はその検出位置と形状から以下の６種類に分けられた。

①住居の中心に向かって緩やかに落ち込む径８～10㎝程の丸太状の材

②壁面に貼り付いた径６㎝程の材

③住居の中心付近上層部に南北方向に伸びて位置する径18㎝程の丸太状の材
④床面直上に位置する規則性の無い材
⑤ベッド状遺構の上に東西方向に伸びて位置する材
⑥壁面・床面に貼り付く，もしくは埋土中に見られるストロー状の植物遺体
これらの炭化材は，出土状況からもさらに上下２層に大別できる。上層炭化材は①②③⑥が，下層炭化材は②④⑤⑥が該当する（②⑥は両層に位置する）。

さて，上層炭化材の炭化状況は弱く，表面５㎜程が炭化している程度であり，中心は炭化せずに土になっていた。つまり，上層炭化材はあまり燃焼していない。さらに，上層炭化材はいずれもＳＢ３倒壊時の上屋構造を残しており，材の下側（床側）の炭化が著しく，上側（屋根側）は殆ど炭化していないことから，ＳＨ３は屋根がついた状態で住居内部から燃焼したと考えられる。一方，下層炭化材の炭化状況は強く，ほとんどの材は中心まで焼けていた。しかし，下層炭化材のほとんどは出土位置に規則性のないもので，屋根から落ちた材と思われる。これら上下２層の炭化材の状況から，ＳＨ３は材が完全に炭化しない初期の段階で鎮火したと考えられる。

さらに，土層断面の観察では，下層炭化材を含む土層は，層中に細かな炭化物を多く含む層で，上層炭化材の殆とを含む４・５層は，細かな炭化物片を殆ど含まない均質で厚い黄褐色砂質土からなる。ところで，住居跡内の埋土が自然に堆積したとするならば，堆積に時間を要するため，炭化材の含まれる埋土全般に，時間とともに材から崩れた細かな炭化物片が含まれる。しかし，ＳＨ３の４・５層は多数の炭化材を含み最厚部で約40㎝の厚さをもつにもかかわらず，細かな炭化物片は殆ど含まないことから，ＳＨ３の埋土は自然堆積とは考えにくい。恐らく，埋土は掘り方上面まで一気に堆積し，そのうち下層は土とともに材から落ちた細かな炭化物や炭化が著しいため脆弱化した材が混じって堆積し，上層は炭化物を殆ど含まない均質な土が堆積したものと思われる。こうした不自然な堆積が生じる要因としては土屋根が崩れ落ちたか，人為的に土が投入されたかの２点が考えられる。しかし，土屋根と考えられる焼失住居からは，土屋根が焼土化した焼土塊が材とともに確認されるが2)，ＳＨ３は床表面が焼土化したものしか確認されていない。つまり，ＳＨ３は土屋根とは考えにくく，人為的に土が投入された可能性が高い。前述の炭化材の状況と合わせて考えれば，消火作業が行われたためと思われる。

さらに，柱材と思われる材が出土しなかったことから，柱材の抜き取りがあった可能性も考えられる。なお，⑤の材の本数が主柱穴の数と一致するが，⑤の材が直径約10㎝と柱材にしては細く，また，⑤の材の樹種であるハイノキ節は，比較的柔らかく柱材には不向きであることから，⑤の材が柱材に相当する可能性は低いと考えられる3)。

また，Ⅲ章で述べたとおり，遺構内からは土器や他の遺物は殆ど出土しないことから「不慮廃屋」4)とは考えられず，住居内はあらかじめ整理されていた可能性が高い。

以上のことから，ＳＨ３は住居の廃棄行為の一環として，あらかじめ住居内を整理し，意図的に火をつけ早い段階で消火をし，住居の廃棄を目的に行ったもので「焼却廃屋」の可能性が高い5)。

3．長尾古墳群について

長尾遺跡の北側平坦面からはＭＴ４・５，ＳＴ１を確認した。第Ⅲ章で述べた通りその位置関係から長尾古墳群と一連のものと考えられる。

ＭＴ４の墳丘部は削平が激しく，埋葬本体などの施設は確認できなかった。墳丘は尾根を分断する形で溝を２条掘り込み，後に地山を削り出すことによって成形したと考えられる。墳形については現状から方墳であったと考えられる。遺物の出土は皆無であり，その時期についても不明である。

ＭＴ５は墳丘部は消失しており，北側の周溝の一部のみが確認された状態であった。墳形については，周溝が弧を描いていたことから，直径7.5ｍ程の円墳と考えられる。周溝からは土師器・須恵器が出土しており，葬送の儀礼に使用された可能性が高い。このうち，須恵器(20)は田辺陶邑編年の「ＴＫ208型式」，中村陶邑編年の「Ⅰ型式３段階」の特徴をもっており，５世紀中葉頃のものと考えられる。

ＳＴ１からは須恵器３点（21～23）が出土したが，器形はいずれも坏蓋でその検出状況からも供献されたと考えられる。いずれも田辺編年の「ＴＫ43型式」，中村編年の「Ⅱ型式４段階」の特徴をもっており，６世紀後葉頃のものと考えられる。須恵器の出土状況から，木棺が使用されていたと考えられる。また，遺物からＭＴ５→ＳＴ１の順に先後関係が成り立つ。なお，長尾第１～３号古墳試掘調査で，墳丘の裾部に数基の石棺や土墳墓が確認されており，本遺構もそうした埋葬施設と同様の性格をもつ可能性がある。

但し，古墳については，長尾古墳群として考える必要があることは言うまでもない。長尾第１～３号古墳の調査が行われるまではその性格について述べるのは早急であり，今後の調査に期待したい。

注

1．２本柱構造の竪穴住居跡は市内ではこれまで，弥生時代後期前葉のものに下沖５号遺跡第14号住居跡，後期中葉のものに下沖５号遺跡第９号住居跡，後期後葉のものに芳ヵ谷遺跡第３号住居跡，終末から古墳時代初頭のものに黒谷遺跡第５号住居跡，国重城跡遺跡第２号住居跡が確認されているのみであり，太田川東岸では初めての検出例である。
広島市教育委員会「下沖５号遺跡」『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988年
広島市教育委員会「芳ヵ谷遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』1984年
財団法人広島市歴史科学教育事業団『黒谷遺跡発掘調査報告』1995年
広島市教育委員会『国重城跡発掘調査報告』1982年

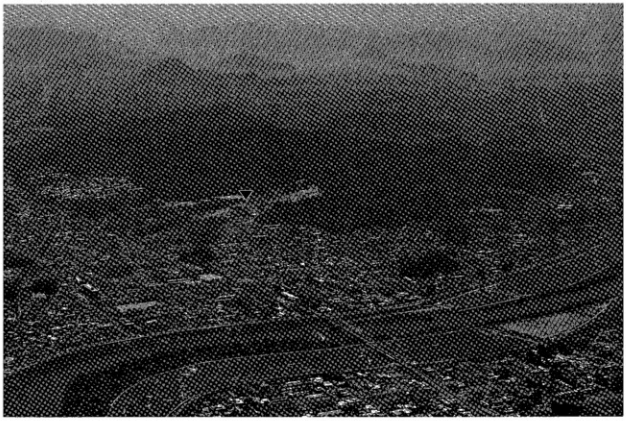
2．宮本長二郎「住居と倉庫」『弥生時代の研究』１弥生人とその環境　雄山閣1990年

3．ハイノキは市域では炭化材として初めての検出例である。
島地謙・伊東隆夫共著『図説木材組織』地球社　1982年

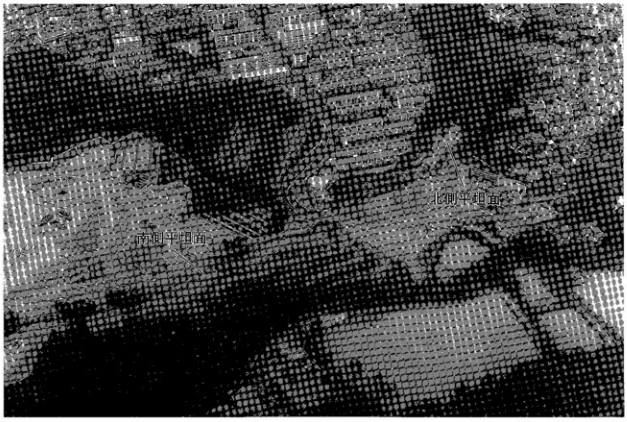
4．桐生直彦「遺物出土状態からみた竪穴式住居の廃絶」『住まいの考古学－住居の廃絶をめぐって』山梨県考古学協会1996年度研究集会資料集1996年

5．４に同じ。

図　　版

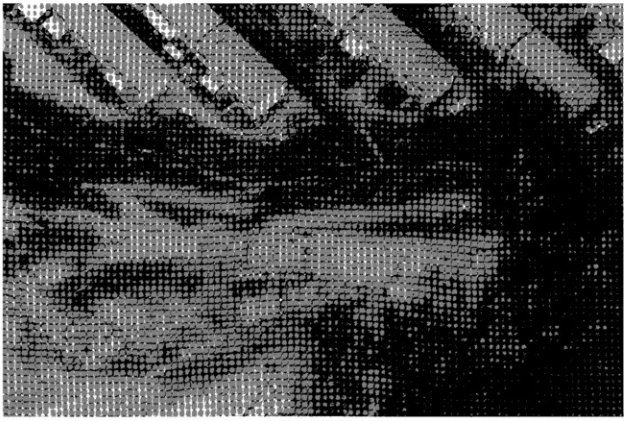


a　長尾遺跡遠景（航空写真・北西から）

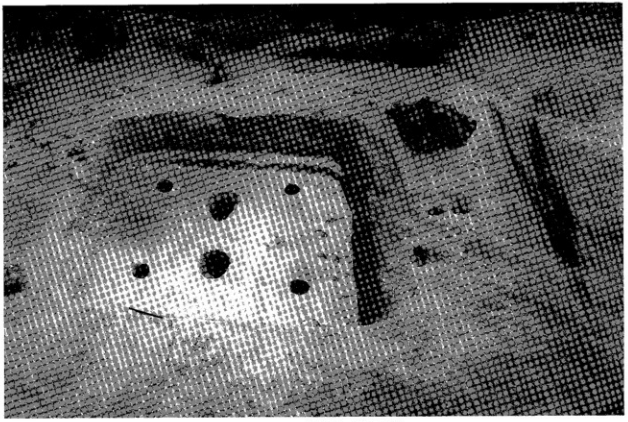


b　長尾遺跡全景（航空写真・南から）

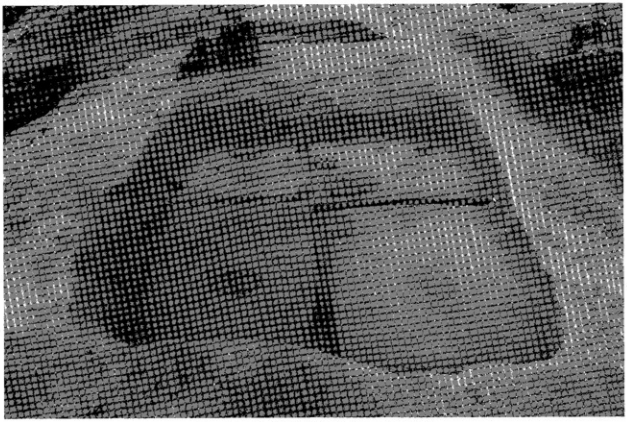
a　南側平坦面近景（航空写真・北から）



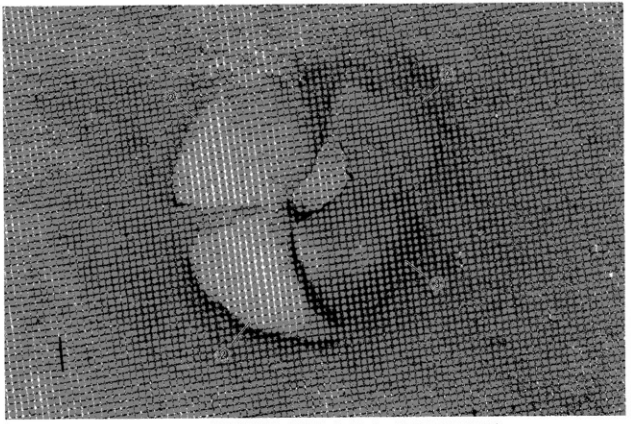
b　北側平坦面近景（航空写真・南東から）



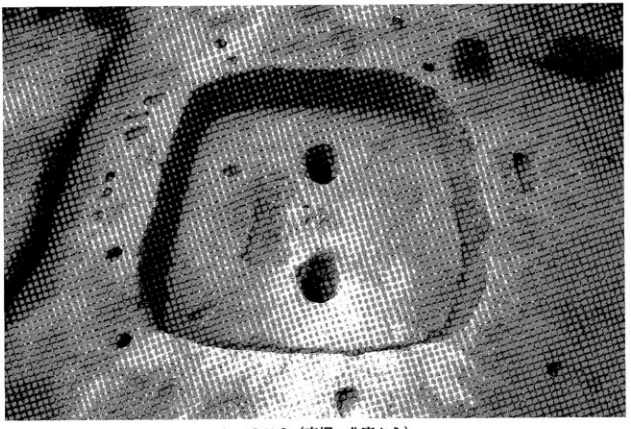
a　SH1（完掘・北から）



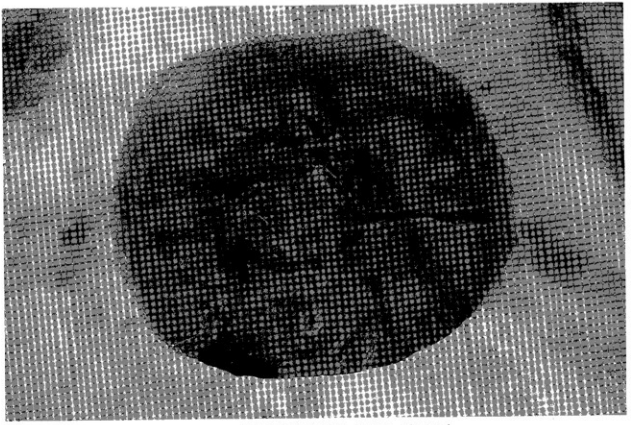
b　SH1b床面検出状況（東から）



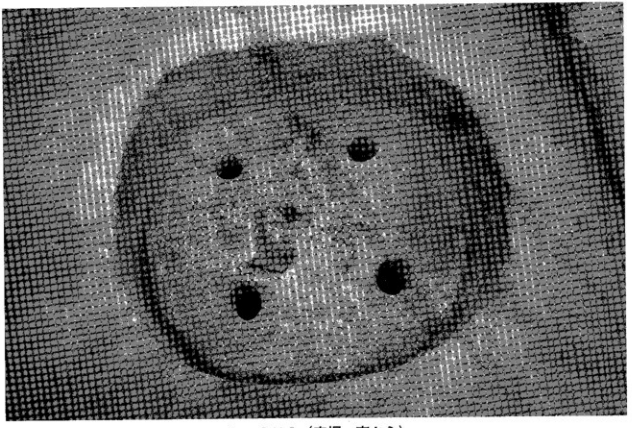
a　ＳＨ１ｂ炉跡土器出土状況（西から・数字は遺物番号）



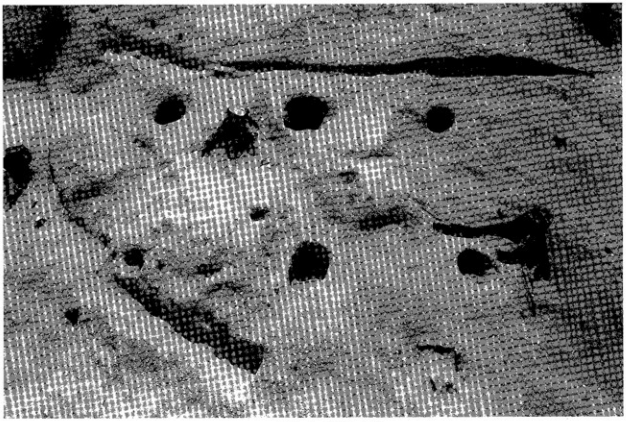
b　ＳＨ２（完掘・北東から）



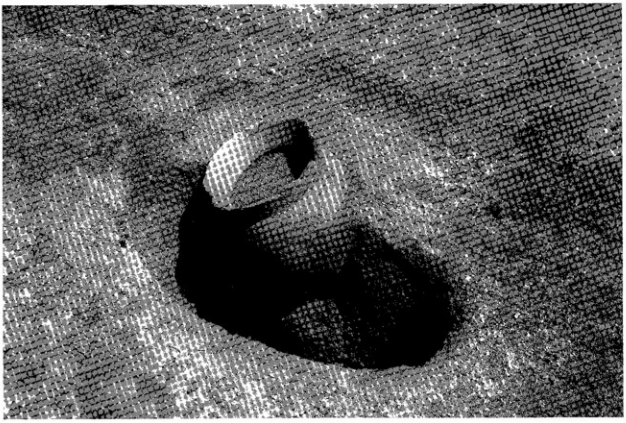
a　ＳＨ３炭化材出土状況（下層・東から）



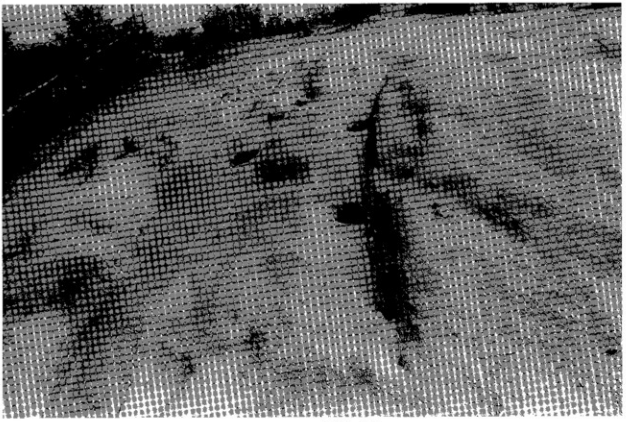
b　ＳＨ３（完掘・東から）



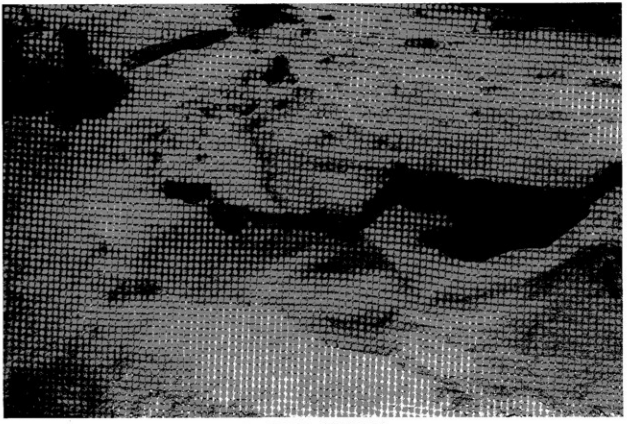
a　SB1（東から）



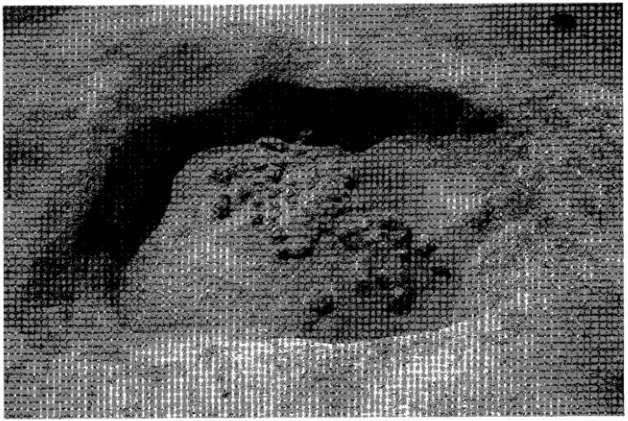
b　SB1・P1土器出土状況（南から）



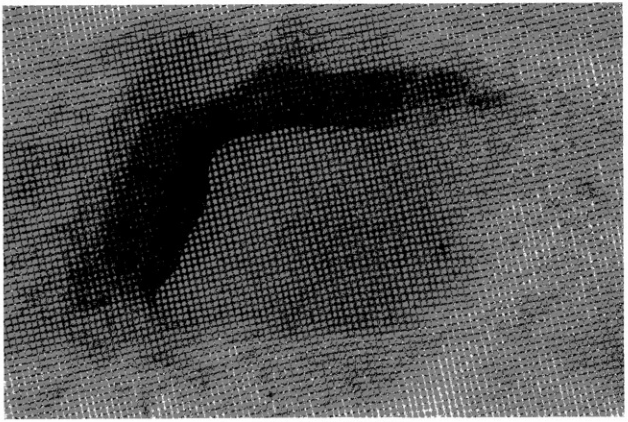
a　ＳＸ１（北から）



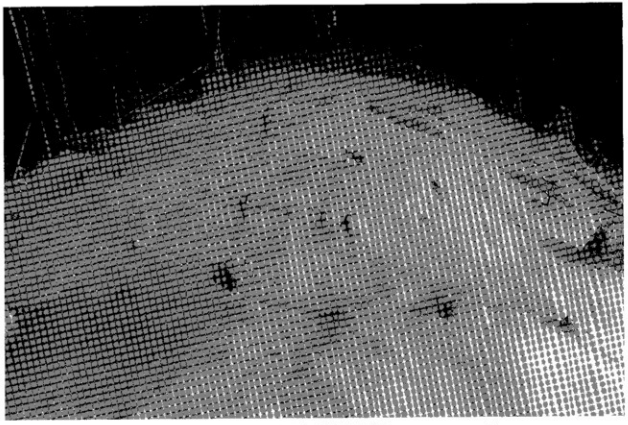
b　ＳＸ３（北東から）



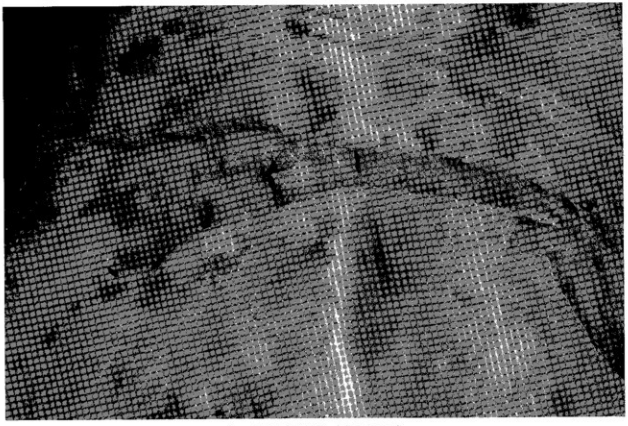
a　ＳＫ１土器出土状況（北東から）



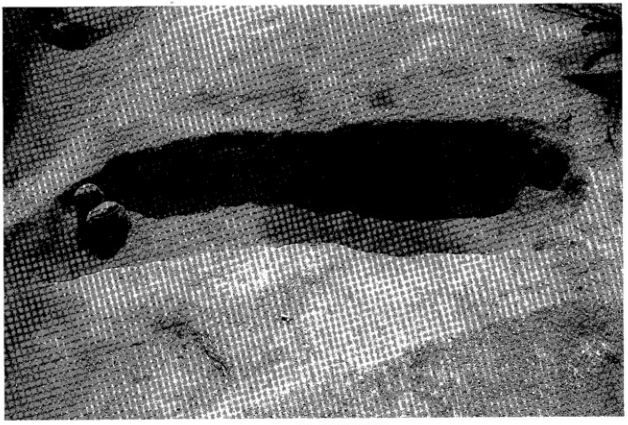
b　ＳＫ１（完掘・北東から）



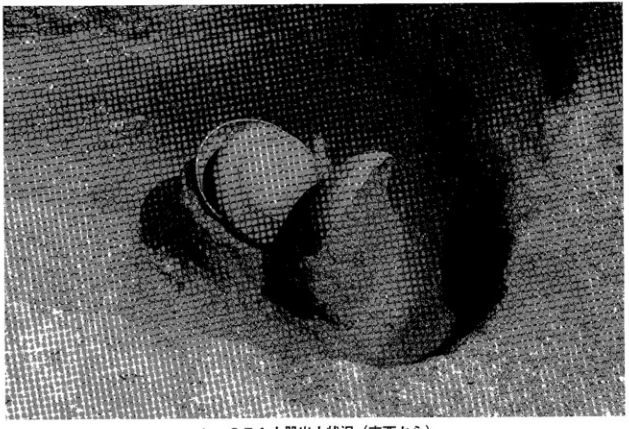
a　ＭＴ４（南西から）



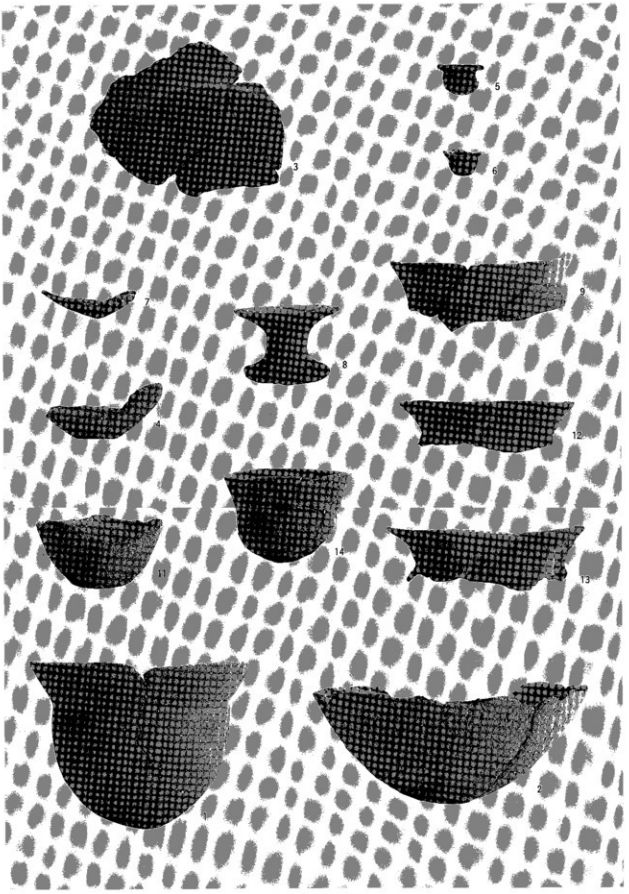
b　ＭＴ５周溝（南西から）



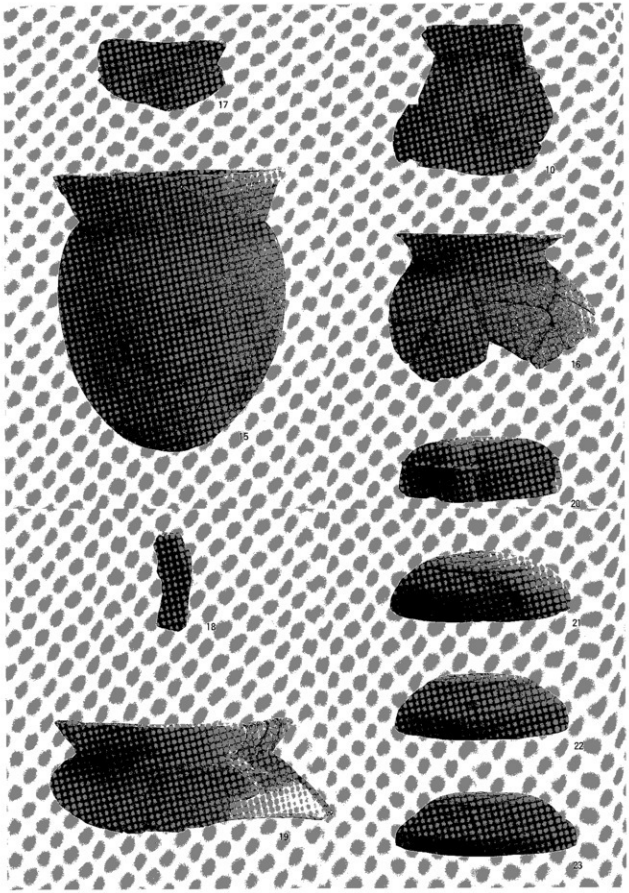
a　ＳＴ１（北東から）



b　ＳＴ１土器出土状況（南西から）



長尾遺跡出土遺物(1)



長尾遺跡出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	ながおいせき　－ひろしましひがしくへさかしょざいー
書名	長尾遺跡　－広島市東区戸坂所在－
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書
シリーズ番号	第５集
編著者名	槌木敬太
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
所在地	〒730-0812 広島県広島市中区加古町４番17号　アステールプラザ内
発行年月日	西暦1999年12月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　’　”	東経 °　’　”	調査期間	調査面積	調査原因
ながおいせき 長尾遺跡	ひろしまけんひろしまし 広島県広島市 ひがしくへさかいつえ 東区戸坂出江	34102	－	34° 25’ 57”	132° 29’ 30”	19980427 ～ 19990225	3,000m²	戸坂住宅団地造成工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長尾遺跡	集落 古墳	弥生時代 古墳時代	住居跡４軒 掘立柱建物跡 1棟 テラス状遺構 3か所 古墳2基	弥生土器 土師器 須恵器 石器 炭化材	焼失住居１軒 長尾古墳群関連古墳

財団法人広島市文化財団発掘調査報告書　第５集

長　尾　遺　跡

—広島市東区戸坂所在—

1999年12月

編集発行　財団法人広島市文化財団
広島市中区加古町４番17号　　TEL(082)248—0427

印　刷　株式会社　中本本店
広島市中区東白島町13—15